

平成 25 年度 調査研究

学校間の接続に関する調査研究

国語

埼玉県立総合教育センター
教育課程担当

【国語】

1 調査研究の視点

平成25年度、埼玉県学習状況調査の結果をみると、小学校では、特に、主語・述語の関係についての理解を見る問題で正答率が29,0%と低い結果が出ている。また、接続語を用いて文を書き直す問題の正答率が65,0%という結果が出ている。文章を読む基礎となるべき言語事項が十分に定着していない現状がうかがえる。また、文部科学省による全国学力・学習状況調査において、比喩に関する力や語彙力の不足があげられている。「比喩」という用語は知っていても実際にテストや日常生活で使えないという現状がある。高等学校においては、【国語における苦手な事項】として「古文の文法」を選ぶ生徒が1学年において25,8%を占め（平成24年4月、調査研究委員所属校で実施のベネッセ・スタディサポート*による。）、文法指導に対して苦手意識を持つ生徒が多いことがうかがえる。生徒の文法指導に対する苦手意識の要因を探るとともに、文法指導の方法、文法を学ぶ意義の意識化を促す指導法について考察する必要がある。

こうした現状を見ると、児童・生徒たちに「適切に表現し、正確に理解する能力を身につけさせる」ためには、言語事項の定着、文法指導の見直しを考えていくことが重要な課題であると思われる。

*株式会社ベネッセコーポレーションによる学習態度との関連によって学習能力の度合いを見ようとする模擬試験

2 研究テーマ

小中高の接続を意識した国語科学習指導
～言語事項の定着を中心に～

国語科は言語活動を行うにあたり全教科の基幹となる教科である。その国語科においてあらためて言語事項について考察することは意義深い。中でも、いまだ検討される機会の少なかった文法指導、学習用語（比喩）の指導について研究し、新たな光をあてることは、国語科指導の大きな可能性を示すことになるであろう。小学校では言語事項の意識化、中学校では文法指導の定着、高等学校では文法指導の活用を目指し、調査研究に取り組むこととする。

3 昨年度の取組

【校種別概要】

〈小学校〉「比喩を意識した学習指導」

平成24年度全国学力・学習状況調査における課題の一つである「比喩」を取りあげ、中学校への橋渡しを意識した学習指導案を作成した。

〈中学校〉「文法指導の定着を目指す年間指導計画」

既習の文法用語を、実際の授業の中で、系統立て、繰り返し学習することで定着を図る年間指導計画を作成した。

〈高等学校〉「中学校の指導との接続を意識した文法指導（古典）」

古典を初めて学習する高校1年生を対象とし、中学校での既習事項を生かした、読みを深めるための文法指導についてその検討を行った。具体的には「筒井筒」の係り結びの指導を行う際、従来暗記に偏りがちであった指導を見直し、「読みを深めるための文法指導」を意識したワークシートを開発し、結果を検証した。本取組により、生徒の文法学習の意義への理解が進み、意欲が高まり、文法を活用した読解に向けての意識が向上する様子が確認された。

4 本年度の取組

【校種別概要】

(1) 小学校「比喩を意識した学習指導」

平成24年度全国学力・学習状況調査における課題の一つである「比喩」を取り上げ、中学校への橋渡しを意識した学習指導案を作成、実践、検証した。

- ① 白岡市立西小学校での検証授業 平成25年11月26日(水)実施 ※詳細は、資料編参照
平成24年度に作成した学習指導案「やまなし」6年(宮沢賢治)を教材とし、実践を行った。本授業は、「心に残った言葉や文の秘密を探ろう」という学習課題のもと、日頃、授業や会話の中で意識せずに使っている「擬声語・擬態語」「比喩」を児童に意識させ、豊かな言葉の担い手として、中学校へ学習をつなげていくことをねらいとしている。

② 研究協議より見えた成果と課題

- 児童が話し合いに主体的に参加していた。
 - 言葉を分類する活動は、中学校での品詞の学習に応用できそうである。
 - 学習用語として「比喩」が定着した授業であった。
- ▼既習事項を系統的、組織的に授業に活かしていくことが課題である。

③ 授業者より

「擬声語・擬態語・比喩」を意識して指導することにより、言葉を意識して作品を読む姿勢が見られた。一つ一つの言葉を見つめることにより、作品全体を読むことにつながった。

小学校では、学習内容と日常生活とのつながりが児童に意識されることが難しい。「授業で学んだことが日常生活に役立っている、つながっている」と意識させることが学習への意欲となる。また、「語彙」の指導において小学校でも言葉を意識する機会を与え、言葉の意味や使い方を考えさせる指導が必要である。

④ 検証授業を踏まえた加須市立北川辺西小学校での実践 ※詳細は、資料編参照

白岡市立西小学校の実践をふまえ、「雪わたり」5年(宮沢賢治)でも実践を行った。この教材も、独特の「比喩」がふんだんに使われている作品である。児童たちは教科書の教材や他の宮沢賢治の作品を読み、美しい「比喩」やリズム感のある表現に気づき、本のポップを紹介する「読書すいせん会」を行った。

実践後、「擬声語・擬態語」「比喩」を意識した学習により、児童たちに作品をより作品の世界をイメージし、自分の言葉で語る事ができた。また、作品や文章に表れる比喩の効果に気付いた児童もいた。自分の考えたことを豊かに表現するために、優れた描写に触れ、語彙を蓄積することが今後の課題である。

⑤ 小学校の実践における成果と課題

「擬声語・擬態語」「比喩」を使い、文章を読むことは児童に文章を読むときの手立ての一つを与えることになった。

また、児童たちが宮沢賢治の世界観を楽しんでいた様子から、「本は楽しい。本には素晴らしい表現がある。」という読書体験をさせる必要性を改めて感じた。言葉に立ち返ることが授業の基本という国語教師のあり方を見つめ直した。

小学校では、学年が上がるにつれ学習意欲が減退する傾向があり、小学校での学習が中学校の学習に役立つと実感できることが必要である。小学校と中学校が連携し年間指導計画を見直すなど組織的且つ系統的な取組が必要である。

(2) 中学校「文法指導の定着を目指す年間指導計画」

既習の文法用語を、実際の授業の中で、系統立て、繰り返し学習することで定着を図る年間指導計画に基づき授業を実践、検証した。

① **松伏町立松伏第二中学校での検証授業** 平成25年6月18日(金) ※詳細は、資料編参照
 平成24年度に作成した年間指導計画の中から「握手」3年(井上ひさし)を教材とし実践を行った。「副詞」を意識して授業を行うことで、筆者の意図や作品における効果的な語の使い方、読者の位置について作品を見つめ直す授業である。本授業は、生徒に高等学校への授業の橋渡しとして、「文章を正確に読んだり、適切に表現したりする手段」として意識させ、文法学習の意義を見つめ直すことがねらいである。

② **研究協議より見えた成果と課題**

- 文法(副詞は隠れた心情を表わす)にこだわる学習をすることで読みが深まった。
- 文章の構造を学ぶ学習になった。文法を「読むこと」と分けて指導するのではなく、手立てとして学ばせる意義があった。
- 中学校での学習を見通し、小学校では、学んだことを活用する、方法を教えることが大切だと思った。
- ▼文法の学習の定着に差がある。
- ▼文法は繰り返し学習することで定着させるものという教師側の固定観念があるが、その一方で「正確に読む」「適切に表現する」ための手立てとして文法はあるという文法を学ぶ意義を指導する際に持つことが必要である。

③ **授業者より**

文法で学んだ学習用語「副詞」が「読み取りに生かせる重要な言葉」であるという意識を生徒に持たせることができた。さらに、取り立て指導をしたことで、他の副詞も自然と注目して読む姿勢ができた。

言葉一つを取り上げたことで、登場人物の様子や文章の展開に生徒が気づき、より注意深く表現の工夫を読む大切さ、おもしろさを実感させることができた。

④ **検証授業を踏まえた上尾市立大石中学校での実践**

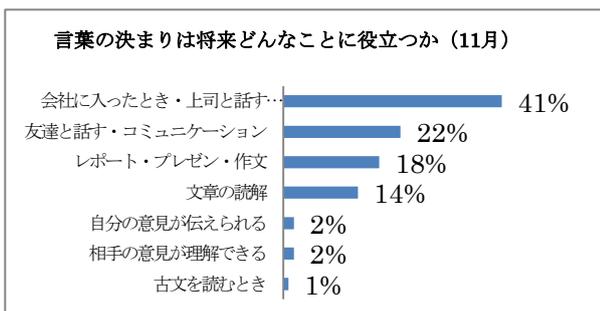
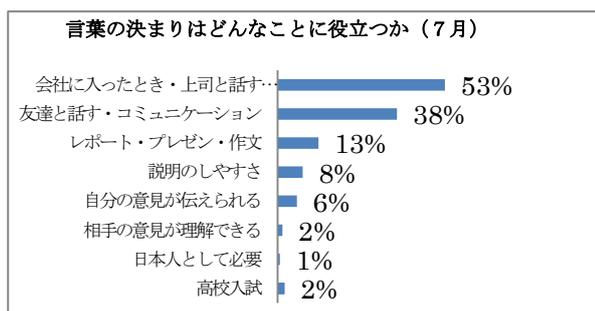
※詳細は、資料編参照

年間指導計画にある文法の時間だけでなく、単元を通して文法指導を行った。例えば、説明的文章で「指示語」と「接続語」が文章の中でどう効果的に使われているかを確認したり、「指示語」「接続語」を必ず入れ、故事成語を用いた体験談を書いたりする学習を行った。

アンケートの結果、「指示語」「接続語」が定着し、「指示語」「接続語」を意識して文章を読む生徒が大幅に上昇した。また、文法に関する意識調査では、7月にはなかった文法を「読むこと」に意識して考えている生徒が出てきたのには大きな意味がある。

文法用語の定着に関する調査	7月	11月
接続語を知っていますか。	61%	94%
指示語を知っていますか。	88%	93%
文章を書くときに接続語を使えますか。		93%
文章を書くときに指示語を使えますか。		85%

*7月は文章の中で、接続語・指示語を扱っていないのでデータはなし。



⑤ 中学校の実践における成果と課題

改めて言葉にこだわる国語の授業を行うことの必要性を再認識した。言葉を一つ一つ取り上げて学習することで、文章に流れている筆者の意図に気づくことができた。国語の授業だからこそ、何度も文章を読む姿勢を生徒も指導者も持つことができた。こういった学習を積み上げていくと、文章を書く際に生徒たちがより自分の思いに近い適切な語彙を選ぶようになって考えられる。

今後も既習事項を生かし、3年間の指導計画を大切にしながら、文法の学習を他の単元を通して定着させる指導および高等学校へつなげるための文法学習の意義を考えさせる指導を目指したい。

(3) 高等学校「助動詞「る」「らる」に着目した『羅生門』の指導（現代文）」 ～県立朝霞西高等学校での実践、検証～

① 文法指導における問題点の考察と指導の提案 ※詳細は、資料編参照

古典の学習における文語文法の指導については、文法指導のみを取り立てて行い、読むことから乖離してしまっていることの問題点が指摘されている。これについては昨年度の本調査研究でも取り上げたところである。

現代文においても文法に関する意識を持たせ、読むことに生かすための指導が十分行われているとは言い難い。今回は『羅生門』について検討を加える。

『羅生門』は「境界」を象徴的に描いた作品であると言われている。注 『羅生門』は、門の下、楼の上、老婆と対決しその論理を聞く、楼の下へ駆け下りる、の4つの場面から構成されており、これがそのまま境界を意味していると思われる。それぞれの境界で下人が行為を選択していくことで物語は進行していくわけだが、いずれの場面においても、生徒は一方的な倫理的判断を下してしまうことが多い。しかし、選択場面において助動詞「れる」「られる」に着目することで新たな視点が提示できる。

段落	下人の行動選択場面〈境界〉	本文	内容
1	羅生門に来るか、来ないか	・暇を出さ <u>れた</u> ・雨に降り込め <u>られた</u>	他に行き所がない様子
2	老婆を発見し、逃げるか、見るか	六分の恐怖と四分の好奇心とに動かさ <u>れて</u>	つい見入ってしまう様子
3	老婆を捕らえ、殺すか、殺さないか	下人は初めて明白に、この老婆の生死が全然、自分の意志に支配さ <u>れて</u> いるということを意識した	感情的に、無計画、無意志的に行動した様子
4	盗むか、盗まないか	飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出さ <u>れていた</u>	老婆の論理によって行動の根拠を得た様子

この表からは、下人が選択の〈境界〉に立たされるとき、受身の助動詞「れる・られる」が用いられた記述になっており、下人が受動的な状況にあることが見て取れる。下人が自ら行為を選択しているというよりは、否応なしにそうした状況に追い込まれ、環境の影響を受けながら選択していることがうかがえる。こうした状況を読み取らせることで、これまでのある意味一方的な生徒の読みに変容を迫ることができるのではないだろうか。

さらに、『羅生門』を扱うにあたっては中学校との接続においても有益であると思われる。『羅生門』は高校1年の初期に行われることが多く、中学校との接

続を考えるうえで適切な教材である。中学校での助詞・助動詞の学習を再確認し、文法学習の意義を理解し、文語文法の学習に生かしていくことができるのではないだろうか。

② 授業の実際と成果

助動詞「れる・られる」に着目した指導を行った。授業前後で生徒にアンケートをとり、考察を行った。そこから以下のような結果が得られた。

○生徒の感想文の分析から、多くの生徒が下人の置かれた状況に言及し、下人の状況を自分に置き換えて読むことにつながっていたといえる。助動詞「れる・られる」の学習は、『羅生門』の人物の置かれた状況を把握することに有効に働いたと考えてよいであろう。

○学習後のアンケートでは、生徒が文法学習の意義について「登場人物の置かれた状況がわかる」こと等記述しており（69%）、文法学習には読みを深める意義があることを理解していたと考えられる。

○文法を意識した指導を行った結果、文法学習に対する意識の変化が見られた。特に、意欲を減退させていた生徒が「物語の中で文法の勉強をするとおもしろい。」のように記述するなど、助動詞を学習する意義を感じ、意欲を向上させている様子が見られた。

（振り返りアンケートより）

《『羅生門』学習の前後では、文法学習への意識の変化がありましたか》

あった 87% なかった 8% 未記入 5%

自由記述

- ・物語を読むのに助動詞が重要だと思えるようになった。
- ・助動詞なんて時制がわかればいいのかと思っていただけで、受身を知ることで違う見方ができるようになった。
- ・一文一文読んでいなかったのが、意識するようになった。
- ・助動詞を学んで、文章の読み方がわかった。
- ・一文字違うだけで全体の意味が変わってしまうことに驚いた。

③ まとめ

『羅生門』における受身の助動詞の働きに注目した指導を行った結果、生徒が文法学習への意義を意識するようになり、学習意欲の向上につなげることができた。文法学習を読むことに生かすことができたといってもよいであろう。

また、「書くこと」を通して、「言葉」、「文章構成」、「概念」について、意識化を図る実践も試みた。生徒は、「書くこと」を通してあらためて言葉に向き合い、格闘していた。口語・文語の接続と合わせて、こうした角度からの検討も今後、具体的に行っていきたい。

注 平岡敏夫『羅生門』の異空間『日本の文学』有精堂出版 関口安義『羅生門』を読む 小沢書店

5 本年度の成果と課題

（1）成果～国語教師としての共通認識からの出発～

2年間にわたり、「小中高の接続を意識した国語科学習指導～言語事項の定着を中心に～」のテーマのもと、小中高の接続を意識した調査研究を行った。

小学校では言語事項の意識化、中学校では文法指導の定着、高等学校では文法指導の活用についてその重要性が再認識されたのはもちろんだが、同じ国語を教える者であるということにあらためて気づかされた。教師一人一人が、校種にかかわらず、国語教師としての共通認識を持ち、系統的な指導を行うこと

が、滑らかな接続につながるのではないか。こうした原点に立ち返ることが児童生徒の学びの連続性を支えるのである。特に「話す・聞く」「書く」「読む」を支える言語事項において、教師自身が共通認識を持ち、系統的な指導を行うことは重要である。互いの校種の実態を知り、理解しながら継続的に指導を行う。たとえば学習用語の使い方や、学習形態においても学習の継続性を意識した方法で行っていく。こうした地道な指導を行うことで児童生徒は安心して国語の学習に取り組めるのである。その具体的な実践が今回の言語事項、文法指導に着目した取組である。これは言葉に立ち返る授業の構築といってもよいであろう。

小学校では「やまなし」「雪わたり」の指導の中で、言葉の重要性を認識させることができた。児童は擬声語・擬態語・比喩の学習を通して作者の仕掛けに気付き、複数の観点で読むことができるようになった。また、言葉に着目することで想像力を膨らませ、作品世界を深く味わうことにもつなげることができた。中学校では年間指導計画を作り、実践する中で、生徒の文法学習への意識の変化と意欲の高まりを感じることができた。生徒は言葉に着目し読むことの面白さを実感していった。生徒の読みの深化には目を見張るものがある。高等学校においては助動詞「れる・られる」に着目した『羅生門』の指導を通して、読みの深まり、さらに文法学習の意義を感じさせることができた。暗記中心と思われていた文法学習に一石を投じ、文法事項の機械的な理解から文法学習の意義へと転換を促すこととなった。

これまで漠然と読んでいた文章、平板に見えていた作品世界は、言葉に着目することでより整然と立体的に見えてくる。言葉一つ一つに込められた作者の意図を読み解く、作者が言葉で示してくれている道しるべに気付かせる等、文法は読むための大きな助けとなる。そして、こうした言語事項の指導、文法学習の有用性を生徒に認識させ、読解と結びつけることが、読みの精度を高めていくのである。

小中高の教師自身が共通認識を持って指導することで、国語科としての指導を系統的に積み上げていくことができるのではないだろうか。

(2) 課題

調査研究を行う中、文法用語等の指導が系統的に行われていない現状が見えてきた。これについては組織的な取組の中、共通認識をもっていく必要がある。また文法指導に着目した実践があまり行われてこなかったという実態も見えてきた。継続的に実践を積み上げていくと同時に、その重要性について広く発信していきたい。

6 研究のまとめ

平成25年度、国語科では2回の検証授業を含む計5回の部会を持ち、小中高の接続を意識した調査研究を行った。検証授業で実際に授業を見、協議する中で、互いの理解を深めることができた。学習形態や指導方法について異校種からヒントを得たり、学習用語の理解・定着についてその系統的な指導の重要性を再認識したりすることができた。何よりも国語教師として共通の認識を持つことができたのは大きな収穫であろう。今後、教科のレベルにおいても小中高が連携し、学びの系統性を確保していくことが求められると考えられる。その重要性について広く知らしめ、生徒の学力向上に生かしていきたい。

1 はじめに

小学校では、はじめて文字が読めたり書けたりするようになる一年生から、自分の思いを表現できるようになる六年生まで、国語科における学習内容は大変多く、教材を通してスパイラルで学習を進め、思考力・判断力・表現力を高めていく。しかし、目先の教材に振り回され、既習の指導事項を押さえずに指導を進めていくことになる。児童には基礎的・基本的な知識・技能が身につかなくなり、伝え合う力が不足していくとともに、国語に対する関心・意欲が薄れていく心配がある。平成24年度全国学力学習状況調査の結果、書くことでは全国平均を0.5ポイント、言語事項では全国平均を0.8ポイント下回るという結果が出ている。自分の考えを具体的に書くことや読み取るための言語事項の習得に課題があり、書くために言葉への関心を高め、言語感覚を豊かにし、表現の技法について理解することが大切になってくる。そこで、優れた文章に出会い、語彙を豊かにしたり、言語事項を押さえた学習を行ったりする必要がある。

2 中学校との連携を見据えた指導

中学校では、文法用語が多く出てくるが、内容は小学校で学んできているものもある。しかし、中学校へ進学すると学んできていたはずのことが生かされていないという結果が出てきている。文法用語への抵抗もあるかもしれないが、小学校としては、優れた表現をされている文章を扱い、既習の文法事項を取り上げた学習を行っていけば、中学校との学習に対するギャップも減るものと思われる。そして、表現するための手法を理解し、言葉に親しみをもって国語科の学習を進めていけば、他教科への言語活動へも生かしていけるとと思われる。

3 事例

平成24年度 全国学力・学習状況調査の課題より
〈読むこと〉 比喩という言葉と結びつけて表現の仕方を理解すること



学習指導要領 国語 第5学年および第6学年 「C読むこと」(2) 内容エ
「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」
「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1) イ
「(カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと」
「(ケ) 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」

↓ そこで…

第6学年 作品の世界を深く味わおう 「やまなし」
○場面についての描写をとらえ、作品の中で使われている表現を味わいながら、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。

【指導事例】

第6学年2組 国語科学習指導案

平成25年11月6日（水）

授業者 教諭 前田 信之

在籍児童数

1 単元名・教材名 作品の世界を深く味わおう 「やまなし」

2 単元について

これまでの国語の学習の中で、児童は様々な作品と出会ってきた。高学年で学習するだけでも、説明的な文章・文学的な文章を合わせて、次のような作品が挙げられる。

- ・人物のかかわり合いを読み、感想を書こう 「のどがかわいた」
- ・筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう 「見立てる」「生き物は円柱形」
- ・伝記を読んで、自分の生き方について考えよう 「百年後のふるさとを守る」
- ・作品を自分なりにとらえ、朗読しよう 「大造じいさんとガン」
- ・説明のしかたについて考えよう 「天気を予想する」
- ・詩の楽しみ方を見つけよう
- ・自分の考えを明確にしながら読もう 「ゆるやかにつながるインターネット」
- ・物語を読んで、自分の考えをまとめよう 「わらぐつの中の神様」

【以上 5年生】

- ・自分の体験と重ねて読み、感想を書こう 「カレーライス」
- ・文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう 「感情」「生き物はつながりの中に」
- ・伝統文化を楽しもう 「伝えられてきたもの」
「柿山伏」「柿山伏について」
- ・作品の世界を深く味わおう 「やまなし」「イーハトーブの夢」【本単元】
- ・ものの見方を広げよう 「『鳥獣戯画』を読む」
- ・言葉について考えよう 「言葉は動く」
- ・物語を読んで、考えを深めよう 「海の命」

【以上 6年生】

それぞれの作品が、内容とともに優れた文章表現の特徴を備えるものであった。それらを想起し、本教材「やまなし」で文章表現、文芸作品の多様性、豊かさについて考えるのも、6年生のこの時期には重要なことであるとする。

児童は、日常生活の中で「擬声語・擬態語」「比喩」などを使って、自分の考えや思いを伝え合っている。会話の中はもちろん、日記や作文の中でも「擬声語を使おう」「『たとえ』の表現をしよう」という意識は全くもっていないまま、使っているのである。

本時の授業は、自分たちも「擬声語や擬態語、比喩表現を使っている」ということを意識させることを「ねらい」としている。

本教材「やまなし」は、児童がこれまで学習してきた作品と比べ、擬声語・擬態語・比喩を多用している。この点については、児童も一読しただけで気づくであろう。その「気づき（初発の感想）」から、本時の学習課題「心に残った言葉や文の秘密を探ろう」につなげていく。

まず、児童の感想の中から、「表現の工夫」について言及しているものを、意図的に取

り上げる。それは、本時の授業で「擬声語・擬態語・比喩」について指導したいという「ねらい」があるからである。授業の前に、取り上げた感想をプリントにして、本時の教材とする。

次に、そのプリントにある感想を、児童に分類させる。「分類する」という明確な目的により、児童は、感想をよく読み、どのように分類したらよいか思考し、判断することになる。しかし、この段階の児童の考えは、「音を表した表現」や「様子を表す表現」など具体的ではない。具体的でないために、児童は、その表現の方法を意識できないのであると考える。

そこで、最後に、児童の考えは大切にしながら、「比喩」という言葉は教えたい。そして、児童から「ここに比喩が使われている」という発言が出るようにしたい。

3 単元目標

- (1) 物語の情景や言葉の使い方に興味をもったり、作者の考え方や生き方を知ったりしようとしている。 **【関心・意欲・態度】**
- (2) 「やまなし」に描かれた情景や作者の思いを、叙述に即して豊かに想像を広げながら読むことができる。 **【読むこと】**
- (3) 比喩的な表現（擬声語・擬態語・色彩語・比喩）の効果的な使い方を理解することができる。 **【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】**

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・物語の情景や言葉の使い方に興味をもったり、作者の考え方や生き方を知ったりしようとしている。	・「やまなし」に描かれた情景や作者の思いを叙述に即して豊かに想像を広げながら読んでいる。	・比喩的な表現（擬声語・擬態語・比喩）の効果的な使い方を理解している。
学習活動に即した評価規準	①学習のめあて、活動の内容と手順がわかり、宮沢賢治の作品を読もうとしている。 ②情景や独特の表現に興味をもち、「表現の工夫」について考えようとしている。 ③谷川の底の様子を自分なりに想像しようとしている。 ④宮沢賢治のものの見方や生き方について進んで知ろうとしている。	①物語をはじめて読んだ感想を書いている。 ②作品に描かれている情景を、叙述に即して読み取っている。 ③作者の思いを、作品の叙述に即し、想像しながら読んでいる。 ④「イーハトーヴの夢」から宮沢賢治のものの見方や生き方を読み取っている。 ⑤他の作品の特色や宮沢賢治の思いについて、自分なりに読み取っている。	①比喩的な表現（擬声語・擬態語・比喩）の効果的な使い方を理解している。 ②物語の構成について意識をもっている。

5 指導と評価の計画

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○全文を通読して、物語の大体の内容をつかみ、初発の感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> 単元のめあて 「作者の考え方や生き方と重ねて、作品を豊かに読もう。また、他の作品へと読み広げよう。」（教科書 P102） 題名から連想すること 「なぜ、宮沢賢治は、『やまなし』にこの題名をつけたのだろうか。」（教科書 P125） → 学習のゴール 全文通読 初発の感想の書き方 → 気になった文を視写する。 	アの① 発言の内容の分析や態度の観察 エの① 感想を書く様子の観察 書き上がった感想
2	○「初発の感想」から、作品に表れている「表現の工夫」について考える。	<ul style="list-style-type: none"> 擬声語・擬態語 比喩 	アの② 発言の内容の分析や態度の観察 オの① 活動の様子や学習感想の分析
3	○「五月」の谷川の様子を想像しながら読み取る。 → 会話や擬声語・擬態語・比喩などから、幼いかにの兄弟の様子や情景を想像しながら読む。	<ul style="list-style-type: none"> 個人学習のしかた 叙述への線の引き方 書き込みのしかた 擬声語・擬態語・比喩 	アの③ 発言の内容の分析や態度の観察 ウの② 活動の様子や学習感想の分析
4	○「五月」の谷川の様子を想像しながら読み取る。 → 「かわせみ」が出現したときのかにの兄弟の様子や情景を想像しながら読む。	<ul style="list-style-type: none"> かにの兄弟の様子 谷川の底の変化 擬声語・擬態語・比喩 	アの③ 発言の内容の分析や態度の観察 ウの② 活動の様子や学習感想の分析
5	○「十二月」の谷川の様子を想像しながら読み取る。 → 成長したかにの兄弟の様子と情景を想像しながら読む。	<ul style="list-style-type: none"> かにの兄弟の様子 谷川の底の変化 擬声語・擬態語・比喩 	アの③ 発言の内容の分析や態度の観察 ウの② 活動の様子や学習感想の分析
6	○「十二月」の谷川の様子を想像しながら読み取る。 → 「やまなし」が落ちてきたときのかにの兄弟の様子と情景を想像しながら読む。	<ul style="list-style-type: none"> かにの兄弟の様子 谷川の底の変化 擬声語・擬態語・比喩 	アの③ 発言の内容の分析や態度の観察 ウの② 活動の様子や学習感想の分析

7	○「五月」と「十二月」の様子を対比して相違点や類似点を見つけて書き込む。	・場面の確認 ・相違点と類似点 ・感想の交流	ウの③ オの② 活動の様子や学習感想の分析
8	○資料「イーハトーブの夢」を読んで、作者についてまとめる。→年表づくり	・年表の書き方 ・作者の生きた時代・考え方	アの④ 学習態度の観察 ウの④ できあがった年表
9	○作者の作品や生き方について感想を発表する。 ○宮沢賢治の他の作品を鑑賞する。	・感想の交流 ・作品の鑑賞	アの④ ウの⑤ 感想発表の様子の観察
10	○学習を振り返り、なぜ、宮沢賢治は『やまなし』に、この題名をつけたのか、自分なりの結論を書く。	・学習のまとめ ・感想の交流	アの④ ウの⑤ 感想交流の様子や書き上がった結論

6 本時の学習指導

(1) 目標

比喩的な表現（擬声語・擬態語・比喩）の効果的な使い方を理解することができる。

(2) 評価規準

情景や独特の表現に興味をもち、「表現の工夫」について考えようとしている。

比喩的な表現（擬声語・擬態語・比喩）の効果的な使い方を理解している。

(3) 展開

学 習 活 動	学 習 内 容	指 導 と 評 価 の 創 意 工 夫	時 間
1 前時の学習内容を想起する。	○前時の学習内容の確認 ・「やまなし」のあらすじ ・感想を書いたこと	・前時に「やまなし」を読んで、心に残っている場面を想起させる。 ・前時に書かせた「初発の感想」を「感想集」としてプリントにして配る。 ※まだ、内容理解が充分でない ので、表面上わかりやすい「言葉」に関する感想が多かった。 → 児童の実態から「学習課題」をつくった。 → 教師の指導したいこと ・作者が作った言葉 ・擬音語・擬態語・擬声語 ・比喩（直喩・隠喩） に合わせ、意図的に感想を選ぶ。	5
2 本時の学習課題を確認する。	○本時の学習課題の確認		10

感想集（例）

- ・言葉がおもしろい。「クラムボン」「カフカフ笑ったよ」
- ・静かできれいな言葉が多い。「水はサラサラ」「夢のように」
- ・「青光りのぎらぎらする鉄ぼうだまのようなもの」とは何だろう。
- ・鳥のくちばしをコンパスに例えていておもしろい。
- ・「もかもか」という表現がおもしろい。聞いたことがない表現。
- ・「トブン」は「ドブン」とまちがえそう。
- ・「天井」はかのにの兄弟から見た「天井」なのかな。
- ・「イサド」ってどんなところなんだろう。

心に残った言葉や文の秘密を探ろう。

3 「心に残った言葉や文の秘密」を探るため、「感想集」の内容を分類する方法を知る。
→ **分類の仕方を知る。**

○分類の仕方
→ 「叙述」に着目して
→ 「共通点」を探して
(サイドライン)
→ 分類した理由

- ・学習モデルとして、教師が、児童の前で分類をしてみせる。
- **分類の仕方を教える。**
- ・「感じかた」ではなく、
〈例〉・きれいな表現
 ・おもしろい表現
 ・静かな表現 (×)
「叙述」に着目して分類することを押さえる。
- 〈例〉・音を表した表現
 ・様子を表した表現
 ・「○○ような」がついている。
 ・他のものに例えている。
(○)
- ・「よい例」と「悪い例」の両方を示す。

4 「感想集」の内容を分類する。
→ **共通点を探して分類する。**

○分類すること
○分類した理由をはっきりさせること

- ・共通する部分にサイドラインを引かせる。
→ 叙述に着目することができるようにする。
- 
- ・なぜ、サイドラインを引いたのか考えさせる。
- ・学習形態を4～5人のグループにして、友達と相談しながら考えてよいことを伝える。
→ グループでの交流
- ・理由まで考えられた児童には、できるだけ簡潔に説明できるように考えさせる。

15

5 分類の仕方とその理由を発表する。

○理由をはっきりさせた話し方

- ・発表を聞いている児童にも、「感想集」にサイドラインを引かせたり、理由をメモさせたりする。

5

<p>6 表現の工夫「擬声語・擬態語」「比喩」を知る。</p>	<p>○擬声語・擬態語 → 音の感じで様子を表した言葉 (教科書 P 125) 〈例〉 ・クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。</p> <p>○比喩 → たとえ (教科書 P 125) 〈例〉 ・月光の黄金は、夢のように水の中に降ってきました。</p>	<p>・児童の「気づき」を大切に する。</p> <p>【参考】</p> <p>・擬音語…実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」など。擬声語。オノマトペア。オノマトペ。</p> <p>・擬声語…①擬音語に同じ。②人・動物の声をまねた語。「きゃあきゃあ」「わんわん」の類。写生語。→擬態語</p> <p>・擬態語…視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象をことばで表現した語。「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」の類。 →擬音語・擬声語 (広辞苑 第五版 岩波書店)</p>	<p>5</p>
<p>7 本時のまとめをし、学習感想を書く。</p>	<p>○学習感想</p>	<p>○今日の授業で、よくわかったこと・よくわからなかったことなどを記述させる。</p>	<p>5</p>

7 授業の実際

○児童は、付箋に言葉を書き出し、いろいろな考え方で分類していた。グループで交流をしていくと、同じ言葉でもグループの考え方によっては分類の仕方が違っていた。

【例】

『サラサラ』 → 音の表現
→ くりかえしの表現
→ **川の中の様子**

『青白い火を燃やしたり消したりしているよう』 → 色を表している
川の中の様子
たとえの表現

『水晶のつぶや金雲母のかけらも』 → 物を使った表現
賢治らしい表現
川の中の様子

これらの意見をクラス全体で交流していくことで、児童は「作者である宮沢賢治は、いろいろな表現の工夫をして、川の中の様子を表していたんだ」ということに気づいていった。

また、言葉一つ一つに着目した授業を行ったことにより、次に作品を読んだときには、「これも川の様子を表しているんじゃないかな」というように「言葉」を意識できるようになってきた。

○表現に着目させることにより、児童は、自ら「五月」と「十二月」の表現を比べることができた。

【五月】

「上の方や横の方は、**青く暗く銅のように**見えます。そのなめらかな天井を、**つぶつぶ**暗いあわが流れていきます。」

「ゆれながら**水銀のように**光って、

→ **底の景色は青く、冷たい印象**

「**クラムボン**は 笑ったよ」

「**つうと**銀の色の腹をひるがえして、一ぴきの魚が頭の上を過ぎていきました。」

「日光の黄金は、**夢のように**水の中に降ってきました。」

→ 「**クラムボン**」「**魚**」「**日光**」

「青光りのまるで**ぎらぎらする鉄砲だまのよう**なものが、いきなり飛びこんできました。」

「その青いものの先が、**コンパスのように**黒く

【十二月】

「白いやわらかな丸石も転がってき、小さなきりの形の**水晶のつぶ**や**金雲母のかけら**も、流れてきて止まりました。」

「ラムネのびんの月光がすき通り、天井では、波が**青白い火を燃やしたり消したりしているよう**。」

→ **底の景色は月光で明るい印象**

「もうねろねろ。おそいぞ。あした**イサド**へ連れていかんぞ。」

→ 「**お父さんのかに**」

「**トフン**」

「**きらきら**と黄金のぶちが光りました。」

「お父さんのかには、**遠眼鏡のような**両方の目

とがっているのを見ました。」

→「かわせみ」の登場

「あわといっしょに、**白いかばの花びら**が、**天井**をたくさんすべってきました。」
「光のあみは**ゆらゆら**、のびたり縮んだり、花びらのかげは静かに砂をすべりました。」

をあらんかぎりのぼして、よくよく見てから言いました。」

→「やまなし」の登場

「水は**サラサラ**なり、**天井**の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかって止まり、その上には、月光のにじが**もかもか**集まりました。」
「波は、いよいよ青白いほのおを**ゆらゆら**と上げました。それはまた、**金剛石の粉**をはいているようでした。」

五月の前半は、青く冷たい印象を受ける川の底に、かへの兄弟だけでなく「クラムボン」や「魚」「日光」などが登場してくる。それに対し、十二月は、月光が明るい川の底に、かへの兄弟とお父さんが登場するだけである。

そして、谷川の中に「かわせみ」や「やまなし」が飛び込んできて、川の中の様子に変化が起きる。動きの激しかった五月は、「白いかばの花びら」の登場で静かに終わり、かへの兄弟の「あわの大きさ比べ」ではじまった十二月は、「やまなし」がお酒になるのを楽しみに待つことで終わる。

「表現に着目する」という読み方により、児童自らが「五月」と「十二月」を比較し、作品の文章構成についても考えることができた。

○本単元の学習では、「中学校での学習を見通した指導」を意識した。

小学校の教科書（光村図書）には「比喩」「擬声語・擬音語・擬態語」という言葉は掲載されていない。しかし、教科書には（P125）「音の感じで様子を表した言葉」「たとえ」ということは記されている。そこで、児童には

○比喩・・・「たとえ」を使った表現

○擬声語・擬音語・・・音の感じで様子を表した言葉

というように指導した。

合わせて、これまでに書いた作文や詩の中で「比喩」や「擬態語・擬声語・擬音語」を使っていたこと、日常の会話の中でも、意識せずに使っていることを教えた。

小学生の児童は、学校で学んだことが「日常生活に役立っている」「日常生活とつながっている」ということを意識していない。小学校低学年のうちには、何の勉強をしても楽しく、「なぜ、勉強をするのか」ということを考えることはなかった。学習内容も「生活科」が教科になっているように、児童の日常生活に近い内容であった。しかし、学年が上がるにつれ、学習内容も難しくなり、日常生活との「つながり」もわかりにくくなっていく。「なぜ、勉強しなくちゃいけないの？」という疑問から学習意欲をなくしていく児童も多くなっていく。

そこで、学校での学習が日常生活と「つながっている」こと、「役立っている」ことを「意識化」させる必要がある。「意識化」させるためには、教師がはっきりと「教える」必要があると考える。本時の学習では、日常生活で使ってきている表現方法を分類させ、「比喩（たとえ）」や「擬声語・擬音語・擬態語」というように、名前を付けて「意識化」させた。

○テストの活用

中学校・高校では、国語科担当の教師が、授業で教えたことをもとにテストを作っている。しかし、小学校では多くの場合、業者から買ったテスト（いわゆるワークテスト）を行っている。小学校では担任が全ての教科を教えなければならないため、各教科全てのテストを作るのは難しい。また、中学校・高校では、中間テスト、期末テストという区切りでテストを行うが、小学校では各単元の終わりにテストをする。そのためテストの機会が多く、その全てのテストを作るのは難しい。

小学校で行っているワークテストは、「漢字」「言葉」の問題が出題されていることが多い。言葉の意味や使い方を、改めて見直す問題である。これらの問題を軽視することなく、しっかりと解説を加えたり、児童に意味を調べさせたりするだけでも、児童の言葉の知識が増え、「語彙不足」ということも減ってくるのではないかと考える。

【指導事例】

第5学年1組 国語科学習指導案

平成25年11月15日(金)

在籍児童数 25名

指導者 坪井 陽子

- 1 単元名 本の世界を深める
教材名 「雪わたり」(宮沢賢治)
「読書すいせん会」をしよう

2 本単元の意図

本学級の児童は読書をするのは好きだが、作文を書くことを苦手としている児童が多い。その理由として、自分が伝えたいことをうまく文章にできないという表現力不足があげられる。その根底にあるのは語彙の不足である。そこで、色々な物語を読み優れた文章表現にふれることで、語彙を増やしていきたいと考えた。

本単元では、読書に親しみ、友だちにも読んで欲しい本について、本の帯をつくったりポップを作ったりして方法を工夫しながら推薦しあう活動を行っていく。並行読書で自分が気に入った本を選び、その中から優れた文章表現を選び出し、それを引用してポップ作りを行うことにした。

「雪わたり」は、人間ときつねの心温まる交流を描いた作品である。この物語は、大きく2つの世界で構成されている。それは、人間の暮らす「里」と、きつねを代表とする動物たちの暮らす「森や林」である。そして、その橋渡しの役割として、雪が固く凍った月夜の晩に、いつもは通れないきびの畑や野原の上で「雪わたり」が行われる。「きつね=人をだます」という先入観から、初めは対立する四郎・かん子と紺三郎。「人間⇄きつね」という対立構図は、児童にとって非常にわかりやすいものである。四郎とかん子を受け入れ、なごませていく紺三郎やきつねの生徒たちと、揺れ動きながらも信じようとする四郎とかん子の心情を追い、対立していた両者が打ち解け、互いに信頼し合う関係へと変化していく様子を読み取らせたい。そして、自分たちが信頼し合っていることを感じ、感動して涙する気持ちにもふれていきたい。

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項について、次のことが指導事項として挙げられている。

(カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心を持つこと

(ケ) 比喩や反復などの表現の工夫に気づくこと

本単元では3時間目に比喩、擬声語・擬態語について学習する。「雪わたり」は国語の教科書で出てくる初めての宮沢賢治の作品であり、これが宮沢賢治との初めての出会いになる児童も多いと思われる。この作品の特徴として非常に優れた情景描写が挙げられる。美しい比喩やリズム感のある表現を味わうことを重視して学習を進めていきたい。宮沢賢治独特の世界観で書かれたこの作品には、片仮名が多く登場し、リズムカルな語り口で物語が展開していく。気持ちの高まりや、喜びを表現したであろう「キックキックトントン」という歌も、よく読むと句読点がある時とない時があるなど、微妙な違いがみられる。登場人物の心情を想像しながら、繰り返し音読する中で、児童なりの読みの深まりが表れてくるであろうと考えられる。また、自然の情景描写に優れ、その中には、数多くの比喩や擬音語、擬態語などの表現がちりばめられている。こうした優れた表現にふれさせ文学作品の楽しさを味わわせるとともに、その工夫に気づかせることで、中学校第1学年の伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ケ)である「比喩や反復などの表現の技法について理解すること」に繋げていきたい。

3 単元の目標

- ・調べたことやまとめたことについて、進んで紹介しようとしている。 【関心・意欲・態度】
- ・相手に分かりやすく伝えるために、複数の本や文書などを選び、比べて読むことができる。

【読むこと】

・紹介をするために適切な語彙を使うことができる。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

4 単元の評価規準と学習活動における具体的評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読むこと	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・お薦めの本を、進んで紹介しようとしている。 ・各自のテーマに沿って、複数の資料を集めようとしている。	・目的に応じて、文章の内容をとらえることができる。	・文章の肯定に気をつけて、書くことができる。 ・主述に注意し、適切な語句を選ぶことができる。
学習活動における 具体的評価規準	① 比喻や情景描写などの優れた表現を味わいながら読もうとしている。 ② 主人公の気持ちを想像し、心情や情景を読み取ろうとしている。 ③ 自分の好きな本のよい所を進んで紹介しようとしている。	① 登場人物の関係性や心情の変化を、会話や行動、比喻や情景描写などの叙述を基に読み取っている。	① 独特の語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもち、宮沢賢治や他の作者の本などにも関心を広げている。

5 指導と評価の計画（ 9時間扱い 本時： 3 / 9 ）

	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	○ 心に残った本を紹介する観点や方法を話し合い、学習課題「読書すいせん会」を設定する。 ○ 単元の目標を知り、「雪わたり」を全文範読し、感想を書く。	・ 学習の見通し ・ 本のポップの役割 ・ 全文通読 ・ 感想の書き方、視点	ア③ ・ 発表の様子や観察 ウ① ・ ワークシート（初発の感想）
2	○ 概観し、あらすじをとらえる。 ○ 初発の感想をもとに、学習計画を立てる。	・ あらすじのとらえ方 ・ 学習の進め方の見通し	ア② ウ① ・ 発表の様子や観察
3 本時	○ おもしろいと思った表現の出てくる場面を選び、紹介しよう。	・ 優れた描写の読み取り ・ 擬声語 ・ 擬態語 ・ 比喻	ア① オ① ・ ワークシート ・ 音読の様子
4	○ 四郎とかん子の2人ときつねの紺三郎の関係はどこで変わったのか、そのきっかけを探す。 ・ 一人学び（書き込みノート）	・ 主題のとらえ方 ・ 登場人物の心情の読み取り	ア② エ① ・ ワークシート ・ 音読の様子
5	○ 四郎とかん子の2人ときつねの紺三郎の関係はどこで変わったのか、そのきっかけを探	・ 登場人物の心情の読み取り ・ 話し合いの進め方	エ① ・ ワークシート ・ 音読の様子

	す。 ・グループ学習 ・全体交流		
6	○「雪わたり」を読んだ感想をノートに書いて、紹介しよう。 ○自分が紹介したいと思う宮沢賢治の本を選ぶ。	・登場人物の心情の読み取り ・感想の書き方 ・ポップの書き方 ・ポップなど様々な推薦方法	エ① ・ワークシート ・作品
7	○自分がすいせんする本の中の面白いと思った表現を見つける。	・読書推薦会の計画 ・本を紹介する観点	ア③ オ① ・ワークシート ・作品
8	○「読書すいせん会」の準備をする。	・読書推薦会の準備 ・推薦方法の工夫	オ① ・作品
9	○「読書すいせん会」をする	・発表のしかた	ア③ オ① ・観察

6 本時の指導（3／9時）

（1）目標

美しい比喩や心引かれる擬音語・擬態語をさがし、雪わたりのポップ作りをする。

（2）評価規準

独特の語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもち、紹介しようとしている。（オ

①）

学習活動	学習内容	◎指導・援助と評価の創意工夫 ・児童の主な反応	時間
1 学習課題をつかむ。	○本時の学習課題の把握	◎初発の感想の中にも比喩や擬音についてのものがあつたことにふれ、もっと探してみることを伝える。	5
宮沢賢治の書く美しい比喩(ひゆ)や、擬音(ぎおん)・擬態(ぎたい)をさがしてポップ作りをし、紹介しましょう。			
2 表現の工夫「擬声語・擬態語」「比喩」を知る。	○擬声語・擬態語 ○比喩	◎擬声語、擬態語、比喩について具体的な例を挙げながら捉えさせる。 ◎自分の選んだ表現はどれにあたるかを考え分類させる。	
3 課題を解決する。	○美しい比喩や擬音の見つけ方	◎自分の気に入った比喩や、擬音を書き抜き、どうしてそれを選んだのかを書く。 ・「雪がすっかりこおって大理石よりもかたくなり、空も冷たいなめらかな青い石の板でできているらしいのです。」 本当に冷たいんだろうなと思った。 真っ平らですべすべしている感じがする。 ・「木なんか、みんなザラメをかけたようにしもでぴかぴかしています」 なんだか美味しそうな感じがする。	15

		<ul style="list-style-type: none"> ・「キシリキシリ」 かたい雪を踏んでいる感じがする。 ・「かた雪かんこ、しみ雪しんこ ……」 楽しそうに歌っている感じが伝わってくる。 ・「キックキックトントン」 何度も繰り返されていて面白い。 歌っているような感じが楽しそう。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価場面</p> <p>学習活動に即した評価規準</p> <p>オ①</p> <p><評価方法></p> <p>ワークシートの記述による分析</p> <p><手立て></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 比喩が見つけれない児童には P42 を読ませ、その中にある表現を見つけさせる。 ・ 見つけれられた児童には、その比喩が気に入った理由や、どんな情景が思い浮かべられるかを書くよう助言する。 </div>			
4 意見の交流をする。	○発表のしかた	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分が選んだ表現とその理由を発表しあう。 ◎友だちが見つけた表現を知ったり、同じ表現を選んでも理由が違うことに気づかせる。 	5
5 自分が選んだ表現を使ってポップ作りをする。	○ポップの作り方	◎心ひかれる比喩や面白い擬音・擬態を紹介するポップ作りに取り組む。	10
6 学習のまとめをし、次時の予告をする。	○学習のまとめ	<p>「今日の学習を終えての感想を書きましょう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎今回の学習が、自分が選んだ宮沢賢治の作品のポップ作りをする時のおもしろい表現探しにつながることを伝える。 	5

7 成果と課題

児童に「比喩」「擬音語・擬態語」という言葉を教えた時には実感がわからないようであったが、言葉の意味を教えると「知っている」「詩の学習で使ったことがある」と今までの学習の中で習ったことがあると認識した。意見の交流を通して、同じ所を取り上げていてもその理由や想像した光景は違って、そこからイメージを更に広げることができた。

比喩

「お月様はまるで真珠のお皿です。」
 →真っ暗な空にぴかぴかときれいなお月様があるのを想像した。
 →青くてまん丸な月の下にきつねたちがいる光景を想像しきれいだと思った。
 →真珠のように光り輝くお月様がきれいだと思った。

「空も冷たいなめらかな青い石の板でできているらしいのです。」
 →なめらかな青い空がずっと広がっている光景が思い浮かんだ。
 →空がすきとおってとてもきれいな様子がわかる。

擬音語・擬態語

「キシリキシリ雪をふんで白いきつねの子が出てきました。」

→ゆっくり静かに雪をふんで歩いてくる感じがする。

→かたい雪をふんでいる光景がうかぶ。

「小さな鏡のようにキラキラキラキラ光るのです」

→まわりがこおっていて太陽が出た時日光が反射して光っている光景がうかぶ。

→雪がとてもすきとおっていてきれいだということがわかる。

→雪がすごくきれいで、ダイヤモンドのような感じが出ている。

「キックキックトントン」

→きつねが楽しそうに面白い音を立てているところを想像する。

→楽しそうに歌を歌っているようだ。

→リズムにのれるので、読んでいて楽しい。

この学習を通して「きれいな光景を表す言葉はたくさんあるんだと思った。」「雪や月、星も色々な表現ができ、より楽しいお話を作ることができるんだとわかった。」「他の人には思いつかない『自分の世界』が伝わってくる。」「他の本を読んだ時面白い表現がどれくらいあるか読んでみたいと思った」という内容の感想を書いた児童も多くいた。「比喩」や「擬音語・擬態語」を意識して読解することにより、より豊かにその世界を想像し味わうことができたと考えられる。

7 時間目の自分がすいせんする本の中の面白いと思った表現を見つける活動にも児童は意欲的で、その物語の様子を想像する手がかりとなる「比喩」や「擬音語・擬態語」探しに取り組んだ。宮沢賢治の物語には、あちこちに美しい情景描写や楽しい表現がちりばめられている。自分でそれぞれすいせんする本を決めているので内容を理解しきれない児童がいるのではという不安があったが、着目する点を明確にしたことにより、宮沢文学の世界観を楽しむことができた。

課題としてあげられるのは、その「比喩」や「擬音語・擬態語」を使う力が育っていないということだ。宮沢賢治の文章から豊かな世界を読み取ったように、表現力をつけることによって自分の考えたことをより豊かに伝えることができるということを意識させ、自分の考えたことをより豊かに伝えるために表現力をつける必要がある。しかし実際には児童はそれを使いこなすだけの語彙力が育っていない。宮沢賢治に限らず、たくさんの作品を読み、優れた描写に触れることにより、語彙を蓄積させていく必要性を感じた。

物語文における「副詞」に着目した学習指導について

松伏町立松伏第二中学校 教諭 神田 博之

1 ねらい

中学校では、文法の授業で文法用語、活用などを学ぶため、生徒は「覚える苦勞が多い」という印象がある。そこで、文法で学ぶ内容を物語文の読み取りでも意識させることで、学んだことをいかせることを学ばせたい。また、文法の授業では、短文を扱って問題演習を行うことも少なくない。今回は、文章全体を読み進めることで、ちりばめられている表現の工夫に気づかせたい。

2 授業の実際（6時間扱い） 教材名「握手」（井上ひさし）光村図書、第3学年

(1) 単元名を「人物をとらえる」とし、単元目標は、「登場人物の様子や文章の展開を読み深めるために、副詞の使い方の工夫に注意して読む。」(指導事項 第3学年「C読むこと」ウ)と「文章を読み、自分の意見をもつ。」(指導事項 第3学年「C読むこと」エ)とした。

(2) 登場人物のルロイ修道士の様子を「副詞」に着目して読ませるために、練習教材を作成し、昔話「桃太郎」から桃太郎の人柄を「人柄を表すことば集」から選ばせた。ここで、「ぎゅっとこぶしを握りしめた」の「ぎゅっと」に着目し、人柄を考える生徒も数名いた。既習事項である人柄をとらえるために「人物描写」「行動描写」「情景描写」「心情描写」「会話文」を確認し、場面の展開に沿って、ルロイ修道士の人柄を読み取らせていった。この学習に続いて、生徒には「ぴんと」という、わずか3文字の「状態の副詞」に着目して読むことで、ルロイ修道士の様子の変化が読み取れることを以下のワークシート、友だちとの交流を行い行った。

三年国語 単元名「人物をとらえる」 三上

三文字「○○○」でルロイ修道士の様子をひかろう

本文の五種類の描写から、ルロイ修道士の「人柄」をつかむことができます。実はたった三文字で「ルロイ修道士の様子」が分かってしまうことに気づきましたか。次のA～Dのルロイ修道士に関する三文字の描写を見つけ、その三文字があるときと、ないときはルロイ修道士の様子がどう違うのかを考えよう。

A (教科書 P 22 L 6)
「わかりました。」
わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

B (教科書 P 22 L 6)
「おいしいですね、このオムレツは。」
ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなど心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。

C (教科書 P 24 L 1)
「よろしい。」
ルロイ修道士は右の親指を立てた。
「仕事がうまくいかないときは、この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。問題を細かく割って、一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないで下さい。」
冗談じゃないぞ、と思った。これでは、遺言を聞くために会ったようなものではないか。

D (教科書 P 25 L 12)
「あの子は今、市営バスの運転手をしています。それも、天使園の前を通っている路線の運転手なのです。そこで、月に一度か二度、駅から上川君の運転するバスに乗り合わせることもあるのですが、そのときは楽しいですよ。まずわたしが乗りますと、こんな合図をするんです。」
ルロイ修道士は右の親指をぴんと立てた。
「わたしの癖をからかっているんですね。そうして、わたしに運転の腕を見てもらいたいのでしょうか、バスをぶんぶん飛ばします。最後に、バスを天使園の正門前に止めます。停留所じゃないのに止めてしまうんです。上川君はいけない運転手です。けれども、そういうときがわたしにはいつでも楽しいですね。」

自分の考え
○私が気づいた三文字とは、「ぴんと」です。この三文字があるとき、ルロイ修道士の様子は（喜ばしく、たり楽しそうにしている）と思います。なぜなら、「ぴんと」親指を立てた後の文を讀むと、「最高だ。」「楽しい」という言葉が出てくるからです。
反対に、この三文字がないときのルロイ修道士の様子は、（元気がない）（）と思います。なぜなら、「食欲がないぞ」と、「遺言のような」と感じているからです。

大前提
「ぴんと」は「状態の副詞」
動作・状態がわかる語

ある ない ない ある

(3) 本文の最後にルロイ修道士と別れる場面（教科書 P18、L18）で、主人公「ぼく」も、「右の親指を立てる」ことが描かれている。ルロイ修道士での学習を終えた生徒たちは、ここでは主人公の行動描写には、「ぴんと」がないことを予想し、答えることができた。

(4) 学習のまとめで、生徒が記入した内容

○私は「握手」を改めて読み、強く印象に残ったのは、ルロイ修道士の行動そのものでした。初めに「握手」を何も考えずに読んだ時は、なんとなくしか「悲しい話なんだなあ」と考えることができませんでしたが、他の人の意見を聞いたり、副詞に注目してみたりして考えが深まるうちに、一つ一つの行動で、こんなにも伝わってくるんだと思うようになりました。そんなことを考えながら読んでいくと、ルロイ修道士のさりげない優しさや悲しさが伝わってきました。(Aさん)

○ルロイ修道士について、新しく気づいたことがあります。それは、初めて読んだときは、ルロイ修道士は、優しくて生徒思いの人というイメージしかなかったけれど、よく読んでみたり、みんなで交流したりして、「陽気な人」「ユーモアのある人」「真面目な人」など、たくさんの新しい考えが出てきて、何回も読み返すたびにルロイ修道士が別の人みたいになってきておもしろかったです。(Bさん)

○ルロイ修道士の行動から分かったことがあります。それは、“大切な人を思う気持ちが起こさせる力はすごい”ということです。私がそう思った理由は、最後の段落に「わたしたちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が腫瘍の巣になっていたそうだとあるからです。身体中が腫瘍の巣になっていたとしたら、会って回るなど苦痛でしかたないと思いました。握手をするときも昔のように“激しく”ではなく、“そっと”握手をしました。そのことから、手にも力が入らないことが読み取れると思います。そう考えると、もしかしたら、ルロイ修道士は、歩くのも苦痛だったのではないのでしょうか。でも、天使園で育った子供達に最後一目会うために力をふりしぼった。私は、そう思いました。(Cさん)

3 成果

○今回は、状態を表す副詞「ぴんと」を取り立てて指導したことで、文法の授業で学んだ学習用語「副詞」が、「読み取りにいかせる重要な言葉」であるという意識を持たせることができた。

○「ぴんと」を取り立てて指導したことで、生徒は他の副詞にも自然と注目して読むことができるようになった。

○わずか3文字の言葉が、登場人物の様子や文章の展開を示すと学べたことで、より注意深く表現の工夫を読む大切さ、おもしろさを実感させられた。

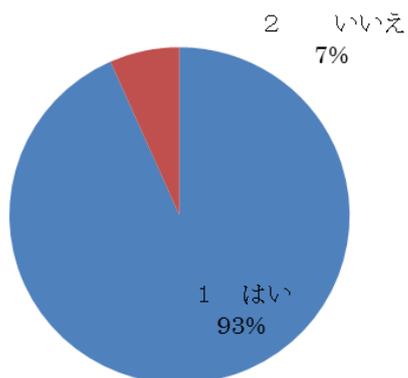
平成24年度の研究では中学校における文法の年間指導計画を作成した。それをもとに、授業を行い7月と11月にアンケートを取った。以下は、7月と11月のアンケート結果である。

国語に関する意識調査 (対象：上尾市立大石中学校1年生)

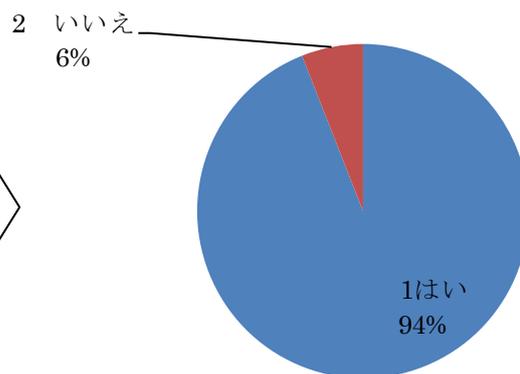
○ことばの決まり(用語)に関する調査

【7月→11月の結果】

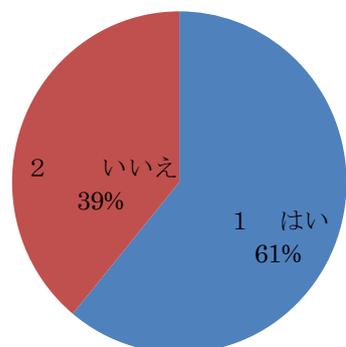
主語・述語を知っていますか



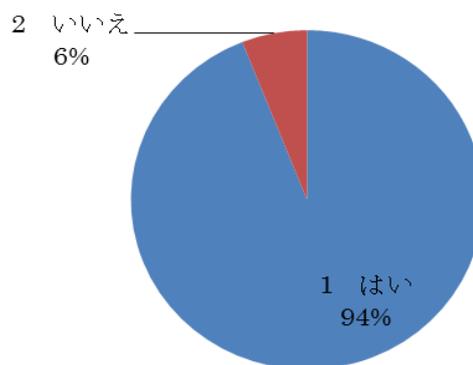
主語・述語を知っていますか



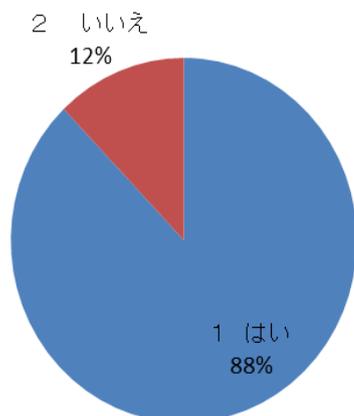
接続語を知っていますか



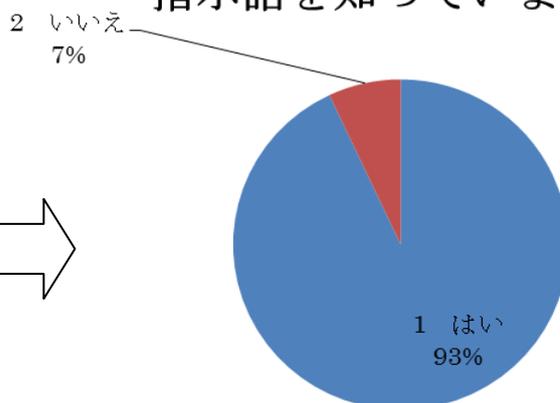
接続語を知っていますか



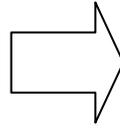
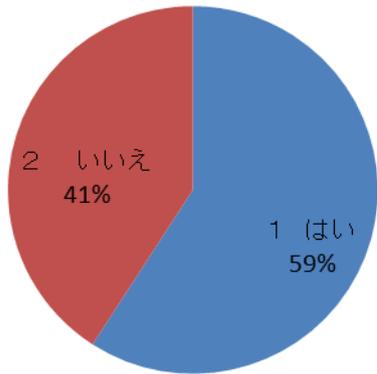
こそあど言葉(指示語)を知っていますか



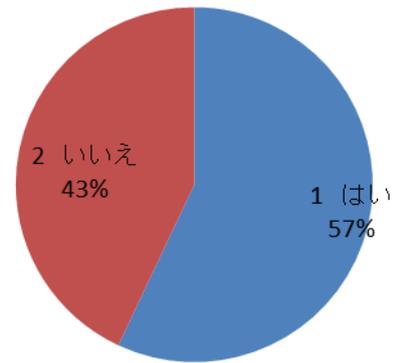
指示語を知っていますか



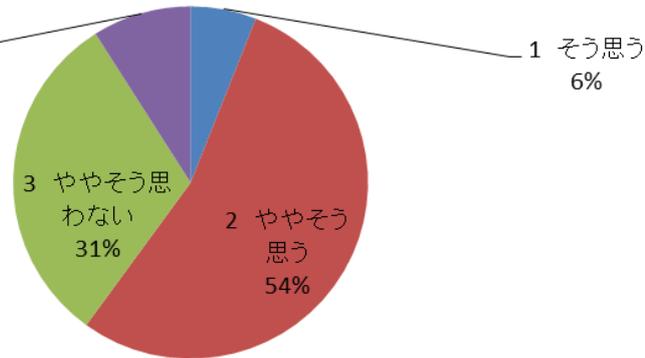
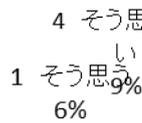
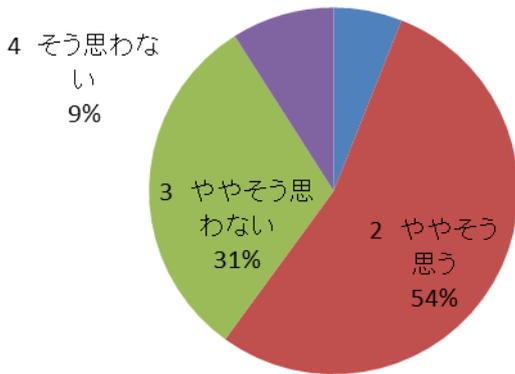
修飾語を知っていますか



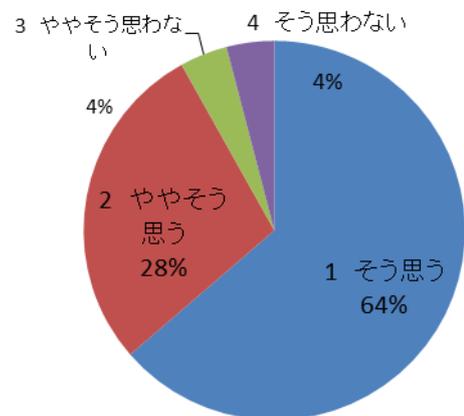
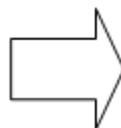
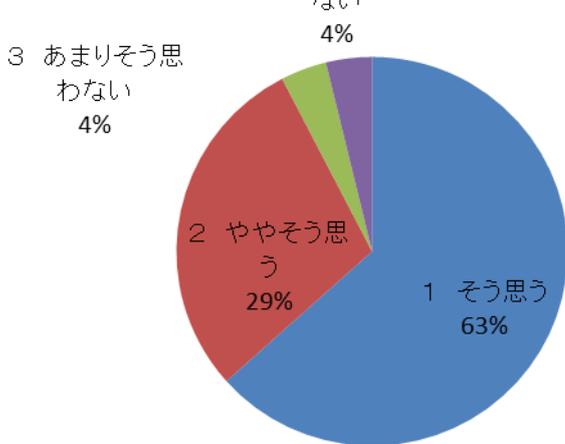
修飾語を知っていますか。



言葉の決まりを学習することは好きですか 言葉の決まりを学習することは好きですか

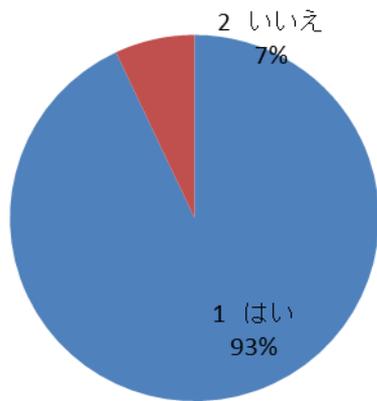


言葉のきまりを学習することは、将来役立つと思いますか。言葉の決まりを勉強することは、将来役に立つと思いますか。

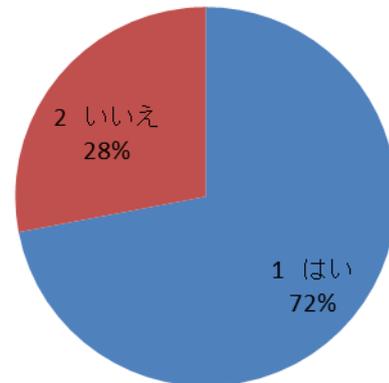


【活用に関する項目】

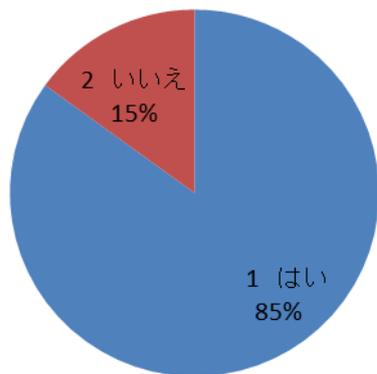
文章を書くときに接続語を使えますか。



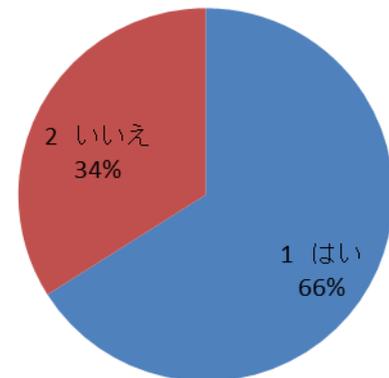
接続語を意識して文章を読むことができますか。



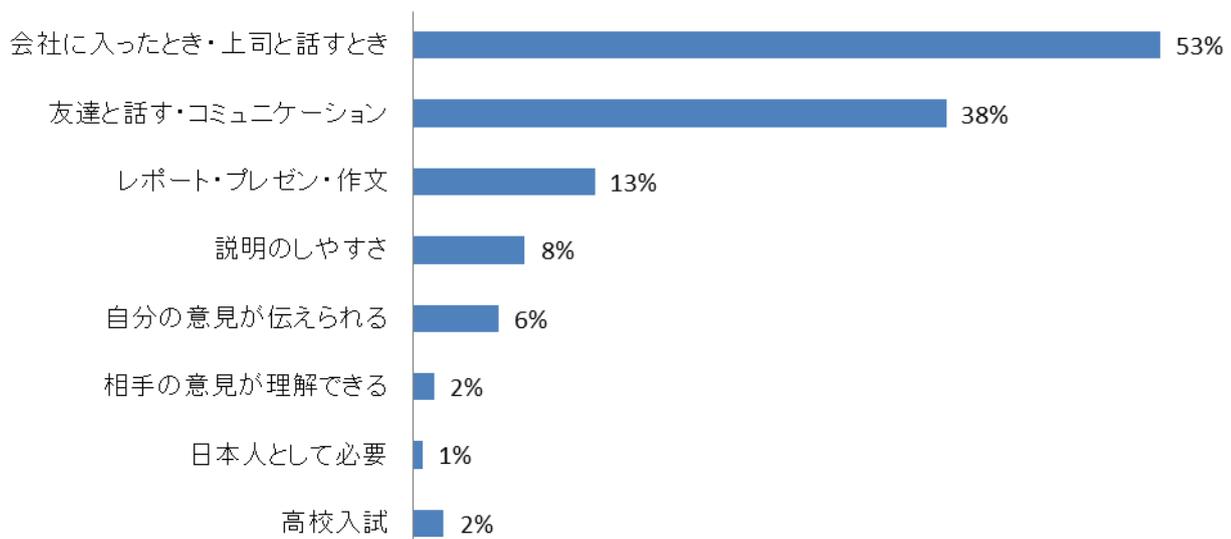
文章を書くときに指示語を使えますか。



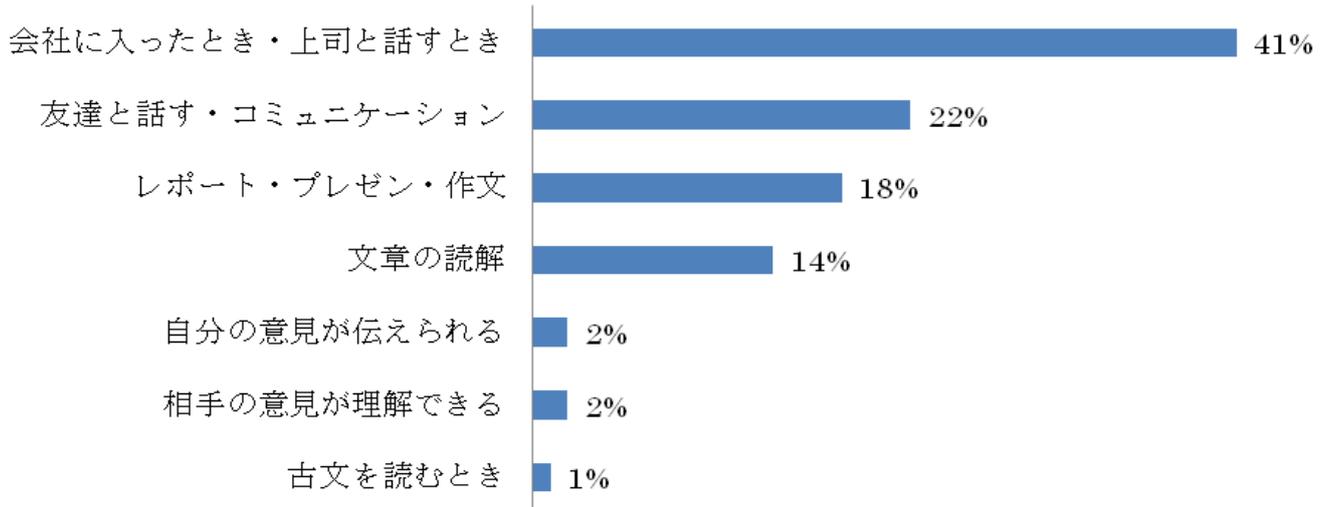
指示語を意識して文を読むことができますか。



言葉の決まりはどんなことに役立つか(7月)



言葉の決まりは将来どんなことに役立つか（11月）



【授業実践】

中学校1年生では、文法の授業は計6時間である。1学期に「文節」2学期に「指示語」と「接続語」の授業を行う。本研究を受け、文法事項の定着のために、文法の授業だけでなく、単元を通して文法を学ばせてきた。

1学期の「文節」については、1学期期末テスト、夏休みあけテスト、2学期中間テストに出題し定着をはかった。

2学期に入り、「指示語」と「接続語」の授業を行った。授業で学習したのち、説明文『タイコンは大きな根?』と『ちょっと立ち止まって』に戻り、指示語と接続語が文章の中でどのような効果があるかを確認した。

また、「今に生きる」の単元では、故事成語を用いて自分の体験談を書く学習を行った。その際、①故事成語を使うこと②指示語を使うこと③接続語を使用すること という課題を出し、指示語と接続語の定着を図った。

【アンケート結果から】

アンケート結果から、接続語や指示語の語句の定着を図ることができたと考えられる。また、言葉のきまりを学習することが好きと答えた生徒の割合が5%上昇した。

	7月	11月	変化
①接続語を知っていますか。	61%	94%	33%上昇
②指示語を知っていますか。	88%	93%	5%上昇
③言葉のきまりを学習をすることは好きですか。	55%	60%	5%上昇
④言葉の決まりを学習することは、将来役に立つと思いますか。	92%	92%	変化なし

(①、②は、はいと答えた割合。③④はそう思う、ややそう思うと答えた割合。)

また、「文章を書くときに接続語、指示語を使えるか」の項目で、はいと答えた生徒の割合は85%以上となった。しかし、「指示語、接続語を意識して文章を読むことができるか」の項目でははいと答えた割合は72%と66%とやや低い割合となった。

文章を書くときに接続語を使えますか。	93%
文章を書くときに指示語を使えますか。	85%
接続語を意識して文章を読むことができますか。	72%
指示語を意識して文章を読むことができますか。	66%

最後に、言葉のきまりは将来どんなことに役立つかという記述のアンケートでは、作文に関する記述が5%上昇した。また、7月にはなかった「文章読解」という回答が14%あった。

「主語・述語」に関して、はいと答えた生徒の割合は高かったものの、「修飾語」は7月と変わらない数値となった。これから文の成分を学習する予定なので、そこで年間指導計画に沿って指導をしていく。

【考察】

本研究を通して、文法の定着のために、文法学習の時間のみの指導ではなく系統的に指導することが望ましいと考えられる。系統だてて学習することにより、生徒が文法の学習の意義に気づき、高等学校へ進学後、古典の授業で文語文法をつまづきが軽減されることを願う。

また、文法の学習を単なる「言葉」の学習としてとらえるのではなく、「書くこと」の能力や「読むこと」の能力の向上につながる学習としても文法の学習の意義は大きいと感じる。

今後も年間指導計画をもとに、文法の学習を系統だてて指導し、文法学習の充実を図っていきたい。

中一高接続期における文法事項の意義の意識化を目指した指導に関する考察
『羅生門』における受身の助動詞に注目して

県立朝霞西高等学校 教諭 森田 恭章

1. 文法指導における問題点の考察と指導の提案

1. 1 現状における問題点

平成 24 年 4 月に勤務校においてベネッセ・スタディーサポート¹が実施された。その中で第 1 学年の生徒が【国語における苦手な事項】として選んだ結果を次に並べた。

【国語における苦手な事項】

現代文	語句の意味や使い方	2,5%
	漢字の書き取り	3,1%
	評論文の読解	9,2%
	小説の読解	12%
	文章による表現・記述	6,8%
古文	文法	25,8%
	語句の意味	5,8%
漢文	現代語訳	24,0%
	句法	7,7%
	語句の意味	4,0%
	現代語訳	6,2%

この結果をみると、古典の文法（文語文法）が苦手であることが問題として挙げられる。しかし、高校第 1 学年 4 月の時点で、生徒が既に文語文法に対して苦手意識を持っているということはそれ以上に大きな問題であるといえるだろう。なぜなら生徒は本校において文語文法の指導をまだ受けていないからだ。また、同時期の第 2 学年の調査結果に注目すると、苦手な項目として文語文法を選んだ生徒は、さらに増加し 42%に及ぶ。入学当初に抱えていた文語文法に対する苦手意識を減少させるよりも、むしろ増幅させてしまっている。これも大きな問題であると考えられる。

1. 2 問題の背景の検討 読むことからの乖離

生徒が古典の指導を受けていないのにも拘わらず、文語文法を苦手とした理由は、もともと文法学習が苦手だったからと考えられるが、ではなぜ文法学習が苦手になったのだろうか。その理由として森山（2002）は、中学校における「学校文法の学習の仕方」の問題点として「これまでの中学校での文法学習が、ともすれば、ただ『覚えるべきもの』としての学習、つまり、知識注入型の学習になっていたという点」²を指摘している。

この、知識注入型の教え方は中学校だけの問題ではない。高等学校においても同様の指導が行われている。『高等学校指導要領解説 国語編』³を参照すると、第 1 学年において履修する「国語総合」の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に文語文法の指導上の注意として次のように述べられている。

【内容の取扱いの(5)】

文語のきまり，訓読のきまりについては，詳細なことにまで及ぶことなく，読むことの指導に即して扱うとする考え方は従前と同様である。したがって，文語のきまりなどを指導するために，例えば，文語文法のみ学習の時間を長期にわたって設けるようなことは望ましくない。

傍線部から、文語文法の指導に関して、文語文法のみを詳細に指導しているという状況が見て取れる。実際筆者は今年度の授業にて、用言の活用について本文を離れて5時間以上の指導を行っている。ここから文法指導における課題が見えてくる。指導要領において「読むことの指導に即して行うこと」とあるのは、文法が読むためのものであると考える。それから乖離してドリルなどで（本校でも使用）規則だけを学んでいく時、文法を学ぶ目的が文章を読むことから文法の規則を理解する事へ変わってしまうことがあるのではないか。すると、その規則を理解できない生徒が文法を学ぶ目的を見失い、学ぶ意欲を失っていくということも考えられるだろう。この傾向が中学校における口語文法の指導においても見られるとすれば、高校入学後の生徒が文語文法の指導を受けていないにも関わらず、苦手意識を持つという可能性も十分あるといえる。また、高校においてその意識を増幅させてしまうことも頷ける。以上から、読むことと文法指導を関係させ、生徒に文法を学ぶ意義を意識化させる指導法の検討をする必要があると考える。

1. 3 解決に向けて 読むことに即した文法指導

ここまで文語文法の指導について検討してきたが、従来の規則重視の指導自体を単純に批判するものではない。反復練習や規則的な指導は実際に効果を上げるからこそ行われてきたと考える。大切なことは、なぜ反復練習を行うほど文法は必要なのか、を生徒が自覚することだろう。では、文法の必要性をどう捉えればよいか。

森山(2002)は「何かを読むときに、文法などの自分の言語的な知識をうまく利用することで「言葉」を意識化し、自分なりに深く味わえることができれば、それはすばらしいことのはず」⁴と述べている。ここからは文法は読みを深めるために必要であるという考え方が見て取れる。これは先述した高等学校指導要領における「読むことの指導に則す」ということにもつながっているといえるだろう。

そこで、本研究では、この「文法を学ぶことによって読みが深まる」という観点を重視し、その指導方法について検討したい。具体的には、生徒にある文学作品について文法事項を手掛かりにして読ませる学習活動を組織する。それによって、自分の読みを深めていく過程を意識化させたいと考える。こうすることで、生徒は文法学習の意義を自覚し意欲的にその学習に取り組むようになるのではないだろうか。

2. 教材の選定 『羅生門』を選ぶ理由

2. 1 作品の特徴と生徒の読みの傾向

『羅生門』は「境界」を象徴的に描いた作品であると言われている。例えば、平岡(1994)は「羅生門は異空間への入り口であり、羅生門という〈境界〉はとりもなおさず、別の世界への門であることを示している」⁵と述べ、作品全体としても、「晴れと雨」「昼と夜」などの〈境界〉が描かれ、下人が昼の論理（秩序）から解放され夜の論理（生命力）を獲得

していく物語として読み解く。さらに関口（2002）は『羅生門』に関する様々な研究者の解釈を列挙しながら「テキスト『羅生門』は、羅生門という〈境界〉をいかにして通り抜け、別世界にはいるかの物語である」⁶とまとめている。

実際の授業においても、羅生門が都市と田舎の境界であり、そこに追い込まれた下人が「盗む」と「飢え死に」することの境界上に立ち、最後、盗人になるまでの心情変化を読み解いていく。しかし、最後の「下人の行方は誰も知らない」という文章に注目させ、下人について感想を書かせると、「老婆を蹴り倒すなんてひどい。盗人になっても最後は死ぬだろう。」と書く生徒が多く見られる。下人が「盗人」を自らの意志で選択し、その結果「報い」を受ける、倫理的な観点からの読みといえるだろう。確かに、最終的に下人は自ら「盗人」を選択したことから、倫理的に悪いということ是可以する。ただ、「盗むことは悪い」という倫理観によって判断を下すだけならばあまりにも一面的な読み方ではないだろうか。

他の研究者による解釈を参照すると、羅生門というテキストの多様性が実感される。例えば三好(1976)は極限状態における下人や老婆の行為は「精神性をまるごと剥奪された生の裸形、そのむき出しの我執はもはや罪ではなく、人間存在のまぬがれがたい石のような事実である」として、「生きるためには仕方がない」ゆえにお互いが「許し合うことだけが可能」⁷と述べ、その人間の心の闇の深さを指摘している。一方吉田(1987)は、下人が老婆の服を盗むことで、法律、習慣、道徳などに従う他者中心の生活体制から「人格内部の抑圧体制を開放し、『自己中心』の反射的情動の中に自己固有の存在確証を掴み、「はじめて、『外の世界』を目指すことが可能になった」⁸と捉える。平岡や関口と同じく、抑圧から解放された下人像を描いているといえよう。また、堀部（1999）は「世間の贈与・互酬の原理」を元に、下人が、老婆から価値のある髪よりも価値のない服を盗んだことに注目し、「下人は老婆の悪事＝死体損傷を容認し、髪を奪わせ続ける。giveである。」とし、下人の「自分の悪事に取りかかる。この take も許されるはずだという」論理を提出する。その上で、下人は生きるために悪も仕方がないという世間の社会性を受け入れて社会人化すると述べる⁹。自己の解放とは正反対の位置にあるとあっていいのではないだろうか。

今挙げた研究者は下人の境界における振る舞い方に注目し、下人がそこを通過することによって、どのように社会への価値観を変容させたかについて述べている。これらの読み方に比べれば、生徒の読みは倫理的な見方に縛られているといえる。関口（2002）は「下人の行為は論理的是非の問題ではない。精神のありようの問題なのである」¹⁰とも述べている。『羅生門』が〈境界〉の物語であるとすれば、読む者にも下人とともに〈境界〉に立ってその振る舞いについて考えること＝「精神のありよう」が問われるのではないだろうか。結果として、「盗むことは悪である」という考えにたどり着くとしても、その過程で、下人が感情や考えを二転三転していくように、読み手である生徒も自分に照らして考えること、つまり読みを深めることが重要になると考える。しかし、では、どのようにすれば、生徒に、下人とともに羅生門という〈境界〉を通過させ、読みを深められるのだろうか。

2. 2 『羅生門』における文法事項 れる・られる

『羅生門』は門の下、楼の上、老婆と対決しその論理を聞く、楼の下へ駆け下りる、の4つの場面によって構成されており、これはそのまま境界を意味している。羅生門へ来る

か、他へ行くか。次に、楼の上へ上がるか、上がらないか。出会った老婆と対決し殺すか、殺さないで話を聞き出すか。最後に、盗むか、盗まないか。下人は、それぞれの境界においてどちらかを選択していくことで物語は進行していく訳だが、生徒が、この下人の選択を自らの意志によるものと捉えることから、一方的な倫理的判断を下していると考えられる。下人がなぜそのような選択をしたのかについて考えが及んでおらず、下人が否応なしに〈境界〉に立たされ、その場の環境に影響を受けながら選択していくことを自らに置き換えられていないといえる。つまり、下人の選択する状況を第三者的に判断していると考えられる。そこで、この、否応なく境界に立たされていることが、生徒に意識されれば、第三者の立場に立って判断する読み方に揺さぶりをかけることができるのではないか。

ではそれはどのようにすれば可能になるのか。『羅生門』のそれぞれの選択場面を参照すると、助動詞「れる・られる」が使用されている¹¹という、文法上の共通点があることに気づく。次のように表にまとめてみる。

【下人の行動選択とそのきっかけとなる「れる・られる」の関係】

段落	下人の行動選択場面〈境界〉	本文 ¹²	内容
1	羅生門に来るか、来ないか	・暇を出さ <u>れた</u> ・雨に降り込め <u>られた</u>	他に行き所がない様子
2	老婆を発見し、逃げるか、見るか	六分の恐怖と四分の好奇心とに動かさ <u>れて</u>	つい見入ってしまう様子
3	老婆を捕らえ、殺すか、殺さないか	下人は初めて明白に、この老婆の生死が全然、自分の意志に支配さ <u>れて</u> いるということを意識した	感情的に、無計画、無意志的に行動した様子
4	盗むか、盗まないか	飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出さ <u>れて</u> いた	老婆の論理によって行動の根拠を得た様子

この表からは、受身の助動詞「れる・られる」によって、下人が選択の〈境界〉に立たされる時、必ず受動的な状況にあることが見て取れる。下人が主体的、意志的にその状況に身をおいたのではなく、否応無しに立たされたこと、そして行動を決定する際もその環境の影響を受けているということを見て取ることができる。そこで、生徒にこの「れる・られる」に注目させながら下人の行動選択していく様子を読み取らせるようにする。すると、下人の〈境界〉に立つ状況を受け止めることができるのではないか。そうすれば、第三者の観点からなされた一方的な考え方に変容を迫ることができるのではないだろうか。

2. 3 『羅生門』と中学校との接続

次に、『羅生門』を中学校との接続の観点から検討を加える。先に生徒の多くは入学当時から文法への苦手意識を持っており、第2学年ではその度合いが増加することを指摘した。この苦手意識を解消するためには、第1学年の古典文法を学習する前が適切であろう。その点『羅生門』は入門時期に配置されていることから時期的にふさわしいと思われる。

加えて、文法的な接続としても『羅生門』は中学校とのつながりがよいといえる。教育

出版『伝え合う言葉 中学国語2』¹³における教育計画では2年生2月に「言葉のきまり ③ 付属語のいろいろ」という教材名で助詞・助動詞について取り扱うことになっており、「れる・られる」等が列挙されている。ただし分類し情報を並べたという印象が強い。例年のように中学校の既習を前提として古典文法の「れ・らる」の学習に入れば、不安定な知識の上に難解な識別方法まで入り、混乱は避けられないだろう。それが高校2年生における古典部法を苦手とする生徒の割合増加につながっているのではないだろうか。そこで、今回中学校で学習した口語における助動詞の働きを高校で改めて確認する機会を設ける。その上で文法を学ぶ意義を意識化することができれば、高校における文語文法への接続もなめらかになるのではないかと考える。

以上、生徒に〈境界〉を実感させ、中学校からの既習事項を確認させた上で、文法の意義の意識化に貢献できる教材として、『羅生門』を教材として選択したい。

3. 授業の実際

3. 1 感想文の分類

『羅生門』を単元として設定するに当たって、まず、生徒に語句の確認などをしながら一読させ、初発の感想を書かせた。次にそれを第2章第2節で検討した研究者の解釈を参考にして分類した結果は次の通りになった(1年A組40名・2名欠席/計38名を対象)。

① 下人の行動は許せない(11名)

[生徒A]

下人はどういう人かよくわからない。老婆に対して下人は悪いことをしたから最後は行方がわからなくなったのだと思う。

[生徒B]

自分が生きるためとはいえ、最後の下人が老婆に対してとった行動はひどいと思った。

② 生きるための悪は仕方ない(5名)

[生徒C]

下人の気持ちはけっこうわかる気がする。生きるためには悪いことをしても仕方ないと思う。

③ 律法に縛られず解放する(2名)

[生徒D]

文の初めから難しい言葉が多くて読みにくかったです。下人は老婆の話を聞いているうちに自分に足りなかった勇気を得られたことがわかった。

④ 社会性を身につけた(1名)

[生徒E]

下人が最後の方で、老婆が髪を抜いても恨まれないなら、自分が老婆の着物をはぎ取っても恨まれないなんて、着物をはぎ取ったところで、そのような知識を身につけた下人は頭が切れると思いました。

⑤ その他（疑問のみ 11 名・感想 3 名・わからないという記述のみ 5 名）

〔生徒 F〕

この「羅生門」の下人は心情などがころころ変わっておもしろいなあと思いました。特に最初は盗人になっても仕方ないと思っていたのに、老婆を見てから自分の考えを忘れて老婆のやっていることに憎悪を覚えたのに、最終的に老婆の着物を持って行ってしまうという下人の行動がおもしろいと思いました。

この分類から、やはり①「下人のしたことは許せない」と書く生徒が一番多いことが見て取れる。〔生徒 A〕の感想を参照すると、下人がなぜ悪いことをしなければならなかったのかについての言及は見られず、下人の置かれた状況を受け止められていないものと考えられる。また、「自分が生きるためといっても」と書いた〔生徒 B〕や「生きるためには悪いことをしても仕方ない」と書いた〔生徒 C〕も、下人の立たされた状況を読み取ってはいるものの、もし自分がその〈境界〉に立ったならば、と問うような姿勢は見られない。実感として〈境界〉の状況を意識できていないのではないか。これは他の感想においても見て取ることができる。

例えば〔生徒 D〕は、「勇気を得られたことがわかった」という記述から、抑圧からの解放に分類したが、この生徒は下人が何に抑圧されていたのかについて言及していない。加えて、勇気を得るという点に注目したものの、その結果盗みを為すということを自分は肯定することができるのかについての記述がない。まだ自分の立場に引き寄せてはいないと考えられる。

また〔生徒 E〕は下人と老婆の関係を互酬関係と見立て、その社会性の獲得に注目し「頭が切れる」と評価しているが、その社会性が下人の未来にどのような影響を与えるかについてはまだ考えが及んでいないと思われる。つまり、文章における事実は読み取るものの、衰微した京都において、誰かを犠牲にし、誰かの犠牲になりながら盗みを働くという重い現実の社会性を自分はどう捉えるか、については想像されていないといえるだろう。

それはまた〔生徒 F〕にもいうことができる。本文における心情変化は見事に読み取っている。しかしなぜころころ変わるのかについての言及がない。下人の行動を追って第三者的に観察しただけに留まっているように見える。もし、この生徒が下人の置かれた状況に立ったならば「おもしろい」の一言で済ますことができるだろうか。

以上総じて生徒の感想は、下人の立たされた状況を受け止め、自分であればどうするかという置き換えがなされていない状態にあるということができる。作品の中に自分の視点を挿入させるよりは、外から第三者的な視点に立って評価を下していると考えられる。そこで、下人がどのように〈境界〉に立たされ、周りの環境にどのような影響を受けながら、通過していったのかを意識できるよう、助動詞に注目した指導を次のように計画した。

3. 2 単元の指導計画

【指導目標】

〈読むこと〉

助動詞に注目しながら読むことで、下人の置かれた状況、心情を理解し、下人の行為について考えを深める。

【単元の評価規準と学習活動における具体の評価規準】

	【興】興味・関心・意欲	【読】読むこと	【言】言語に関する知識
単元の規準	○下人の立たされた状況に自分を置き換えて読もうとしている。	○下人の置かれた状況を読み取り、下人の行動を評価できる。	○作品を読み解くために助動詞が有効な働きをすることが理解できる。
具体の規準	○受身の助動詞を学び、下人の置かれた状況に意識を向けようとしている。 ○感想文において、自分の場合を想像して記述しようとしている。	○下人が否応なしに〈境界〉に立たされ、その環境に影響を受けながら選択することを読み取ることができる。	○受身の助動詞に注目し、下人の置かれた状況を読み解くことができる。

【指導計画】

時	学習内容・活動	指導上の留意点と【評価】
1	語句の整理・初発の感想	初発の感想を書かせる。
2	第1段落 ○下人が羅生門に来た理由を考えさせる。 ○下人の未来を読み取る。	○助動詞の説明をし、「暇を出さ <u>れた</u> 」の「れ」にどのような意味があるのか、考えさせる。 【言】 ○同じ助動詞を探させながら、下人の状況を考えさせていく。【興】【読】
3	第2段落 ○羅生門の2階の様子を絵で描かせてまとめる。 ○老婆を見つけたときの心境を考えさせる。 ○感想で疑問に上がった「なぜ下人は老婆を怒ったのか」考えさせる。	○「無造作」という語に注目させる。 ○下人はなぜ逃げなかったのか、 <u>助動詞に注目させながら</u> 考えさせる。【言】 ○「合理的な理由はない」ことに注目させ、羅生門という舞台の上で感情的になっていることを気づかせる。【興】【読】
4	第3段落 ○下人が老婆を殺さなかった理由を考えさせる。 ○老婆の論理を2点にまとめさせる。	○ <u>助動詞に注目しながら</u> 、感情的で無計画だったことを確認する。【言】【興】【読】 ○老婆の論理 ・生きているための悪は仕方ない ・悪いことをする者には悪いことをしてもよい
5	第4段落 ○感想に書かれていた疑問点を板書し、考え	○ <u>助動詞に注目しながら</u> 、この疑問点に答えさ

	させる。 ・なぜ下人はなぜ勇気が出たのか。 ・なぜ、髪ではなく、価値のない服をはぎ取ったのか。 ・下人の行方はどうなったのか。	せていく。【興】【読】 老婆の論理によって、「意識の外に追い出され ていた」という点に注目する。【言】
6	感想を書かせる ○ワークシートに次の2点をまとめる なぜ服を盗んだのか。 下人の行方はどうなるのか ○友人の考えを聞いて回る。 ○以上の点を踏まえて、自分の感想を書く。	○何人か生徒を指名し、考えを書かせる。 ○友人の考えをメモさせる。 ○下人の行為、下人の行方、友人の考えを踏まえて自分の感想を書く。【興】

3. 3 授業の実際

3. 3. 1 第2時間目の授業の様子 羅生門の下で

なぜ下人は羅生門に来たのかを生徒に考えさせる。当時の衰微した京都の状況をまとめながら下人が暇を出されたことに注目させる。しかし「暇を出す」の意味がわからない生徒が多い。そこで意味を説明すると、もうわかったという顔をするが、ここで重要なのは語句の意味ではなく、「れ」であると示し、次のように板書を始める。

【板書事項】

助動詞「れる・られる」		
A ご飯をたくさん食べる	→ 食べられる	意味 ()
B 偉い人が来る	→ 来られる	意味 ()
C ガラスを割る	→ ガラスが割られる	意味 ()
D ふるさとのことを思い出す	→ ～が思い出される	意味 ()

Aの括弧内に入る言葉を聞くと、「できる」と答える生徒が多い。「できる」を漢字2字に直すように促すと「可能」という意味が答えられる。するとB尊敬、C受身はAに合わせるようにして答えられたが、D自発は難しいようなのでこちらで説明を加えながら「暇を出された」に注目させると、その意味が「受身」とであると回答できた。

次に下人が羅生門に来た理由をもう一つ挙げさせる。助動詞に注目するよう指示すると、「雨に降り込められた」という箇所を探し出すことができた。文意だけでなく言葉の働きに注目させることで「させられた」ということが意識できたと考える。ここまでをまとめ、下人が自ら望んで羅生門に来たのではなく、他に行き所がなかったと整理する。さらに下人の未来についても次のよう板書した。

【板書事項】

《下人の未来》

飢え死に 犬のように捨てられる (受動的)



盗人 生き残ろうとする (能動的)・・・なぜ選ばないのか (選ぶ勇気がないから)

3. 3. 2 第3時間目の様子 楼の上へ

まず下人が覗いた無造作に死体の転がる楼の上の様子を生徒に描かせ、羅生門という空間の怪しさを実感させる。次に老婆を発見したときの心境を考えさせる。もし自分がこの状況で老婆に出会ったらどうするか、生徒に聞くと、自分が下人の立場であったら怖くて逃げてしまうと答える。では、なぜ下人は逃げないのかと発問する。「怖すぎて動けない」などの答えが出る中で、「六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて」と答える生徒がいた。そこでそのときの下人の心情を受身の助動詞に注目させて考えさせると「老婆の行動に引きつけられてしまった」という答えが出てくる。

さらになぜ下人は老婆に怒りを感じたのか、を考えていく。「死人の髪を抜いたから」だけでは足りないことを促すと、「雨の夜に、羅生門の上で」という発言が出てくる。まだ首をかしげる生徒が散見されたので、「合理的な理由はない」という点に注目させ、もう一度なぜ悪そのものに怒りを感じたのかを考えさせる。するとようやく「周りの雰囲気に影響されてしまった」という発言が引き出せた。老婆や周りの環境に影響されて下人が感情的であったこと、つまりここでも受動的であったことを確認する。

最後に下人がこの時点で未来をどう考えているか、理由も含めてと尋ねると、多くの生徒が「悪を憎むので飢え死にを選ぶ」と答えた。ここまでを次のようにまとめた。

【板書事項】

《下人の心情変化》

老婆を発見・・・六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、見入ってしまう



死体から髪を抜いている・・・憎悪・あらゆる悪に対する憎悪



《なぜ》この雨の夜に、この羅生門の上で (環境) 死人の髪を抜く (老婆の行動)

下人の未来・・・飢え死にを選ぶ

《なぜ》悪を憎むから

3. 3. 3 第4時間目の様子 老婆と格闘する

下人が老婆と格闘して倒すまでを指名して読ませ、下人から見て、老婆がどのような状態にあるのかと発問し、ふてくされた老婆「の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した」と書かれていることを確認する。ここで生徒に、なぜ下人は老婆を殺さないのか尋ねる。「ある仕事をして、円満に成就したときの得意と満足があるから」と答える。重ねて「ある仕事とは何か」と聞くと、「老婆を倒すこと」と答える。では下人は初めから計画的に老婆を倒せばよいと考えていたか、と問う。「計画的ではなさそう。」

と答えたことを受け取って、なぜそう思うのか、全員根拠を考えてみてほしいと指示した。すると、助動詞に注目した何人かの生徒が手を挙げて「老婆が倒れた瞬間に、はじめて支配されていることに気づいている。」と答えた。他にも「死人の髪を抜く老婆を見て怒りで冷静さを失い、襲ってしまったが先のことは考えていない」等の発言をした。それらの答えをまとめて板書する。

ここで下人の印象を聞くと、「感情的に振れやすい人間」「この状況では仕方がないので」「でも後先考えなさすぎる」等の意見が出された。

【板書事項】

《下人の行動要因》

老婆の生死を支配した → 意識的

老婆の生死が支配された → 無意識的 ※下人は初め計画的な考えはなかった。

《なぜこのような行動をとったのか》

怒りにまかせて冷静さを失ってしまったから。(環境と老婆の行動が原因)

下人の反応を整理した上で、下人に反論した老婆の論理をまとめる。老婆はなぜ悪くないのか、発表させて黒板にまとめた。

【板書事項】

《死人の髪を抜いてもよい理由》

悪いことをした女なので髪を抜いても許してくれるだろう。

生きていくためには悪いことをしても仕方がない。

3. 3. 4 第5時間目の様子 老婆の服を奪う

下人の決断内容とその理由を考えていく。この場面は初発の感想において、たくさん疑問が書かれた箇所であることを述べた上で「なぜ盗人を選んだのか。」と板書する。生徒に聞くと「老婆の話によって勇気が出たから」という答えが返ってくる。なぜそう言えるのか、根拠を見つけるようにと指示すると「老婆の話を聞いているうちに」という答えとともに「飢え死になどということは、意識の外に追い出されていた」という箇所が挙がる。そこで次のようにまとめる。

【板書事項】

《なぜ盗人を選んだのか》

老婆の話を聞いているうちに

飢え死にという考え

┌ 意識の外へ追い出した(自分で追い出した)

└ ○意識の外に追い出された(老婆によって追い出された)

次に、「なぜ老婆の服を盗んだのか」と尋ねる。髪の毛ならば価値があるかもしれないが、老婆の服は価値がなさそうであることを確認し、答えを求める。戸惑いが伝わってくる。そこで、例えばこのような理由はどうか、と例を挙げて板書する。

【板書事項】

《なぜ老婆の服を盗むのか》

- ア 反発 説・・・自分より下に見ていた老婆の理屈について反発し感情的になったから
- イ 確認 説・・・老婆に共感し老婆の物を盗むことによってその論理を確認した
- ウ 解放 説・・・悪いことをしてよい理由を見つけ老婆から始めて勢いをつけた

以上の3つの他にもきつと理由は考えられることを確認しながら、老婆の服を盗んだ動機は下人の未来につながることを説明していく。その上で、結末がはっきりと書かれていない効果を探ると、多くの生徒が「読者に考えさせるため」と答えた。

この後下人がなぜ服を盗んだか、未来はどうなるのかをノートにまとめさせ、生徒同士で話し合わせた。その上でいよいよ『羅生門』の感想を書かせた。

4. 最終感想とアンケート内容の検討

4. 1 生徒の読みの変容に関する検討

① 下人の行動は許せないと書いた生徒

[生徒 A]

【初発の感想】

下人はどういう人かよくわからない。老婆に対して下人は悪いことをしたから最後は行方がわからなくなったのだと思う。

【最終の感想】

羅生門を学習して、最初は下人がなぜ羅生門に行ったのか、なぜ老婆は髪の毛を抜いたのか、なぜ下人の行方はわからないのか、疑問だらけだった。

しかし読んでいくうちに、下人にはたくさんの不幸が重なりあのような行動をとったのだと思った。老婆の服を剥いだのも、老婆が死人の髪を抜き、さらにあのようなことをいったからだと思う。下人はきつとこの後盗人になると思う。生きるためには手段を選ばないという勇気をもらえたからだ。友人は飢え死にするだろうといていた。反発して盗みを働いただけで、後は結局盗人になれず、また悩んで死んでいくというものだった。もし自分が下人であり、あのような苦しい状況にあって、老婆を見たら、飢え死にを選ぶと思う。後で下人のような人間に怒られて刃物を突きつけられるような老婆と同じ立場になることを考えると怖くて仕方がないからだ。下人は勇気があると思う。

傍線部を見ると、初発の感想に比べて下人がどのような状況にあり、なぜ盗人になることを決断したのかについて読み取っていることが伺える。また、初発の感想では作品中の盗む場面にのみに注目して評価していたが、最終の感想では下人が盗みを働きながら生きる未来に目を向けるようになっていくことが見て取れる。さらに、その覚悟を決めた下人

と自分と比較することで、「下人は悪い」という考えから変容し、網掛け部のように「勇気がある」と評価することができたのではないだろうか。

[生徒 B]

【初発の感想】

自分が生きるためとはいえ、最後の下人が老婆に対してとった行動はひどいと思った。

【最終の感想】

初めは、下人は着物を盗んだひどい人だと思っていたが、老婆の論理を聞いたら下人のしたことは許せるのではないかと思った。友達は、下人はその場の空気に流される人だから、老婆の着物を盗んだ後も悩んで飢え死にするといていた。自分が考えもしなかったのでおもしろいと思った。もし自分が下人の立場だったら迷わず盗人を選ぶと思う。確かに悪いことはいけませんが死ぬよりはましだ。一生は一度しかないのに、こんなところで死ぬのはもったいないし、死ねばそれで解放されるかもしれないが、生きていればこそと思うからだ。全体的に思ったことは決して楽しい話ではないが自分自身を見直せる話だと思う。生死に関する話だが、違う場面だったとしてもこういう葛藤は自分の頭の中で繰り返されているんじゃないかと思う。

傍線部を見ると下人がなぜ盗みを働くに至ったかの原因に注目することで、初発の感想から下人の行動についての評価が一転している。この感想で注目すべきは、自分に置き換えた後に、網掛け部のように作品全体への言及がなされていることだ。なぜ自分は考えを変えたのかという、変容自体を対象化させることで、その変容を可能にした〈境界〉の物語であるこの作品への評価がなされるに至ったのではないだろうか。

② 生きるための悪は仕方ないと書いた生徒（5名）

[生徒 C]

【初発の感想】

下人の気持ちはけっこうわかる気がする。生きるためには悪いことをしても仕方がないと思う。

【最終の感想】

下人は常に受身でなんかあまり好きになれなくなった。ころころ意見が変わり状況に流されすぎだと思う。私は下人は最終的には悪にならないと思う。かといって正義にもなりきれない中途半端なままだと思う。下人は現代社会にもいるであろう、周りの環境によって毒にも薬にもなるタイプの人間だと思う。友人は納得して悪事を働くことを選んでいた。私はハッピーエンドが好きなので別の村で拾ってもらえてひょっこり働くのではとあったが、友人が「下人はころころ考えを変えるから信用されないんじゃない」というので全くその通りだと思った。私が下人なら死人の髪を抜くのは許せないけれど、金持ちをだますのはいいかなと思うので盗人になる。藪医者にでもなっとうどん粉を薬だといって金持ちに売ればいいのではないかと思った。

第三者の目線で「この状況では悪を働いても仕方がない」と書いていた初発に比べ、下人を現代世界に置き換え「周りの環境によって毒にも薬になるタイプ」の人間と評価している。その上で、今度は自分を下人の世界に置き換え想像を膨らませている。文面からは悪を働くのは仕方がないにしても、どうやって生き抜くのかを具体的に考えている様子が見て取れると考える。

③ 律法に縛られず解放する(2名)

[生徒 D]

【初発の感想】

文の初めから難しい言葉が多くて読みにくかったです。下人は老婆の話を聞いているうちに自分に足りなかった勇気を得られたことがわかった。

【最終の感想】

下人は怒りやすく周りに流されやすいがそれだけ優しい人なんじゃないかと思います。友人は老婆の論理に反発し、頭で考える前に体が先に動いてしまったのではないかといっていました。新しい考えだなど思いました。私は、下人は老婆の言うとおりにしただけでその後は悪いことをする勇気もなく、きっと飢え死にしてしまうと思います。下人は若いうちにすむところも仕事もなくし、生きて行くことさえ厳しい暮らしの中で、盗人か飢え死にを選択しなければならないのは、本当に大変だったと思います。

初発の感想では「勇気を得られた」と書かれていたが、その「勇気」に関する具体的な記述は見られなかった。しかし、最終の感想では、波線部で自分に置き換え、また、傍線部で下人の状況を受け止めることで、盗人を選ぶことを「選択しなければならないのは、本当に大変だった」という、実感のこもった評価へと変化していることが伺える。さらに網かけ部において、下人のことを優しい人間と評価しているが、これは下人が環境に左右され苦悩する様子を受け止めていることに起因すると考えられる。

④ 社会性を身につけた(1名)

[生徒 E]

【初発の感想】

下人が最後の方で、老婆が髪を抜いても恨まれないなら、自分が老婆の着物をはぎ取っても恨まれないなんていって、着物をはぎ取ったところで、そのような知識を身につけた下人は頭が切れると思いました。

【最終の感想】

初めのうちは下人が老婆の服を剥いで逃げたところで悪い印象を持っていたが、読んでいくうちに、生きるために仕方なく悪いことをしたということがわかってきて、下人は生きるためによい判断をしたと思った。友人は老婆の論理を言い訳にして悪を続けると言っていたが、それもいい考えだと思う。でも、その考え方が今後も通用するのか疑問がわいた。老婆の論理はすべて正しいわけではない。今後下人が生きて行くには違う考え方もしてい

かなければならないと思う。もし自分が下人ならば飢え死にするより盗人を選ぶと思う。しかし、人の物を盗むたびに罪悪感が増していき、それを背負って生きていかなければならないので、途中で耐えられなくなり盗人をやめ、また違った生き方を探すと思います。

初発の感想では老婆の服を盗んでも「恨まれない」ことに着目し、下人は「頭の切れる」判断をしたという評価を下していた。最終の感想では、下人の置かれた状況を受け止めることで、盗むという選択について、「生きるためのよい判断をした」という評価に変容している。また、生きる力を身につけた下人と比べて、自分は生きるためとはいえ罪悪感にさいなまれて悪を続けられないと述べている。初発の感想よりも、下人の状況を置かれた受け止め、自分の立場へと置き換えることよって、考えを深めていく様子が見て取れる。

⑤ その他（疑問 11 名・感想 3 名・わからない 5 名）

○ 感想を書いた例

〔生徒 F〕

【初発の感想】

この「羅生門」の下人は心情などがころころ変わっておもしろいなあと思いました。特に最初は盗人になっても仕方ないと思っていたのに、老婆を見てから自分の考えを忘れて老婆のやっていることに憎悪を覚えたのに、最終的に老婆の着物を持って行ってしまうという下人の行動がおもしろいと思いました。

【最終の感想】

下人の行動は正しいとは思わないし、間違いだとも思わなかったけど、その心情がころころ変わるのは若者らしくておもしろいなあと思いました。もし自分が下人の立場だったら、下人と同じようなことをしているような気がします。下人はきっと盗んだことを後悔しながら、忘れたり、思い出したりしてなんだかんだ生きていくと思います。自分もきっとすするところからです。

全体的におもしろかったのは下人の行動が受動的だったことです。羅生門の下にいるときも、老婆の場の話を聞くときも、最後に服をはぎ取るときも。だんだん「れ」を探すのがおもしろくなってきて楽しかったです。「羅生門」を勉強していて思ったのは、この話はいつでも生きるか死ぬかの選択があった気がします。そして、老婆は自分が生きるために死人の髪の毛を抜いていたし、下人は最後生きる決意をして門を降りていきました。なので作者がこの話の舞台の「羅城門」を「羅生門」にしたのはそういう理由なんだなあと思いました。

この感想からは、下人の置かれた状況について助動詞を通して意識化し、さらに、作品の中へ入って行って自分を置き換えながら、それらを受け止めて、最終的に作品の外へ出てその作品を〈境界〉の物語として評価している様子が見て取れる。初発の感想においては第三者的に「おもしろい」と一方的な判断をしていて、その状態を抜け出すだけでなく、一度作品内に自分のみを置き換えたことで、「生きるか死ぬかの選択」が実感され、もう一度作品全体を見渡す立場へと変容することへとつながったといえるだろう。

いずれの作品からも、最終の感想では、第三者的で一方的であった考え方を変容させ、下人が〈境界〉に立たされた状況を読み取りながら、その時選択した内容を評価をし、さらに自己に置き換えて読みを深めていることが見て取れる。また[生徒 B]や[生徒 F]のように自分の身を作品の中に置いた上で、その変容を起させた作品の特徴へと意識が向き、この物語の〈境界〉性について言及する例も見られた。

4. 2 助動詞を学習する意義の意識化についての検討

本単元終了時に、振り返りのアンケートを行った。その結果は次の通り。

《助動詞「れる・られる」について学習することで、どんな効果がありましたか》

○主人公の置かれた状況がわかる 等 27名

人や天気で突き動かされる状況がわかる

下人の気持ちを考えられる

下人の選択が状況によってだったことがわかった

○助動詞の意味がわかった 7名

受身の助動詞の使い方がわかった

4種類あることがわかった

○意識して日常使うようになった 3名

意識して読むようになった

○受験の復習になった 2名

問題が解けるようになった

(39名/40 提出)

アンケートの結果から、その記述の文末表現に注目すると、「～できる」「～わかる」という表現が多いことが伺える。辰野(1997)は、方略の認知と使用についてパルマーとゲッツ¹⁴を引用して「方略を使用してもあまり効果がないとするなら、その方略を使用しない」¹⁵と述べている。本実践において方略を「助動詞に注目して読むこと」とした場合、27名の生徒が「人物の置かれた状況がわかる」と記述しており、この方略の効果を、読みを深めることとして自覚しているということが見て取れる。

4. 3 中学校との接続についての検討

高校入学時文法学習を苦手と答えた生徒たちの文法学習に対する意識はどのように変化したか。これも単元学習後のアンケートから検討する。

《『羅生門』学習の前後では、文法学習への意識の変化がありましたか》

あった 34名 なかった 3名 未記入 2名

《変化のあった人はどのように変化したか自由に記述してください》

- ・前は好きでなかったが、読んでいてわかるのでおもしろかった。少し好きになった。
- ・中学の時は文章の中での学習はなかったのでよかった。
- ・物語の中で文法の勉強をするとおもしろい。

- ・物語を読むのに助動詞が重要だと思うようになった。
- ・中学の時はこの助動詞何に使うのかとっていたが、今は友達の会話の中でも意識するようになった。
- ・助動詞なんて時制がわかればいいのかとっていたけれど、受身を知ることで違う見方ができるようになった。
- ・一文一文読んでいなかったので、意識するようになった。
- ・助動詞を学んで、文章の読み方がわかった。
- ・一文字違うだけで全体の意味が変わってしまうことに驚いた。

《変化のなかった人は理由を書いてください。》

- ・中学の時に覚えて知っていたから。2名

アンケートの記述から、文法の学習について苦手意識を持っていた生徒に対して、本研究が行った「読むことに即した文法指導」は一定の効果を得たと考えてよいだろう。特に意欲を減退させていた生徒が「物語の中で文法の勉強をするとおもしろい。」のように文法学習への意欲を高めたことは意義があったと考える。

5 成果と課題

5.1 成果

5.1.1 感想文の分析から、助動詞「れる・られる」の学習は、『羅生門』の人物の置かれた状況を把握することに有効に働いた。

4.1の検討から多くの生徒が下人の置かれた状況に言及していることが伺えた。またその効果は作品の中へ自分を置き換えることへとつながり、中には置き換えによって起こった変容を対象化し、その変容を起した作品自体を評価するに至る生徒も見て取れた。このことから助動詞「れる・られる」の学習は、『羅生門』の人物の置かれた状況を把握することに有効に働いたと考える。

5.1.2 読みを深めることを目的として助動詞を学習することは、助動詞学習の意義を意識化することに貢献した。

4.2で行った単元学習後に行ったアンケートにおいて、生徒が文法学習の意義を「登場人物の置かれた状況がわかる」こと等と記述しており、文法学習が読みを深めるという意義を持つことを理解していたと考えられる。読みを深めることを目的として助動詞を学習することは、助動詞学習の意義を意識化することに貢献したと考える。

5.1.2 読むことに即した文法指導は生徒の文法学習に対する意欲を向上させた。

4.3において行った分析から、多くの生徒が作品理解を目的として文法を学ぶことに「おもしろい」等の評価をしていることが伺えた。以上から、読むことに即した文法指導は生徒の文法学習に対する意欲を向上させたといえることができる。

5. 2 課題 高等学校における今後の取り組み

5. 2. 1 他の作品への応用

本研究では『羅生門』における受身の助動詞の働きに注目して授業を展開したが、他の近代以降の文学作品については検討していない。今回の研究成果を高校 2 年、3 年へと接続させるためにも、他の作品における検討が必要になると考える。

5. 2. 2 文法への接続

本研究では「読むことに即した文法指導」を展開したが、この学習で得られた文法学習への意欲の向上を文語文法の学習へと接続させなければならないと考える。この文語文法における「読むことに即した文法指導」に関しては 2012 年埼玉県総合教育センターにおける学校間の接続における調査・研究において「係り結びに注目した文法指導」として取り組まれている。その成果を踏まえながら、今後は、助動詞の指導などについて、口語-文語の接続を更に具体的に検討して行く必要があると考える。

¹ ベネッセコーポレーション社による学習態度との関連によって学習能力の度合いを見ようとする模試。

² 森山卓郎(2002)『表現を味わうための日本語文法』岩波書店

³ 文部科学省(2010)「高等学校学習指導要領解説・国語」東洋館出版

⁴ 森山卓郎(2002)前掲書

⁵ 平岡敏夫(1994)「『羅生門』の異空間」『日本の文学』有精堂出版

⁶ 関口安義(1999)「『羅生門』を読む」小沢書店

⁷ 三好行雄(1976)「無明の闇-『羅生門の世界』-」『芥川龍之介論』筑摩書房

⁸ 吉田俊彦(1987)「『羅生門』の地上的、動物的イメージと我執の解放」『芥川龍之介-『偷盗』への道』桜楓社

⁹ 堀部功夫(1999)「『羅生門』僻見」『同志社国文学』

¹⁰ 関口安義(1999)前掲書

¹¹ 助動詞「れる・られる」の識別は森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版を参考とした。

¹² 『羅生門』の本文に関しては東郷克美他(2013)『高等学校 国語総合』第一学習社から引用した。

¹³ 加藤周一他(2012)『伝え合う言葉 中学国語 2』

¹⁴ Palmer, D. J. and Getz, E. T. (1988). Selection and use of study strategies: The role of the student's beliefs about self and strategies. In C. E. Weinstein et al (Eds)

¹⁵ 辰野千壽(1997)『学習方略の心理学-賢い学習者の育て方-』図書文化社

『羅生門』学習アンケート

(授業後)

(1) 助動詞「れる・られる」について、現在知っていることを記入して下さい。

(2) 助動詞「れる・られる」を学習することで、どんな効果がありましたか。

(3) 『羅生門』学習の前後で、文法学習への意識の変化がありましたか。

あった

なかった

変化があった／なかった理由を自由に記入して下さい

変化のあった人は、どのように変化したのかを自由に記入して下さい

(4) 「れる・られる」を勉強したことについて自由に記入して下さい。

参考資料① ワークシート

羅生門まとめプリント

1年

組

番

名前

1 下人の行動をまとめよう。

2 下人はなぜ老婆の服を奪ったのか？

〈考えられる理由の例〉

〈あなたは、どのような理由で盗んだと思うか。〉

3 下人の未来はどうなるだろう。

4 友人はどう考えているか。

〈老婆の服を盗んだ理由〉

〈下人の未来〉

『羅生門』を学習して

1年

組

番

名前